

40 解体 三重頭貫  
隅仕口はアリ掛、平は輪雜込みにてほぼ良好な状態であった。



41 解体 三重軸部  
軸部材、長押ともすべて当初のものである。柱の露出面の風化は大きく就中  
東面の風蝕は甚だしかった。現在腰貫の楔が桁行、梁行ともに下楔になって  
いるが、大正修理時に打替えられたもので当初は梁行が上楔で、貫には3種  
咬合わせの仕口になっていた。



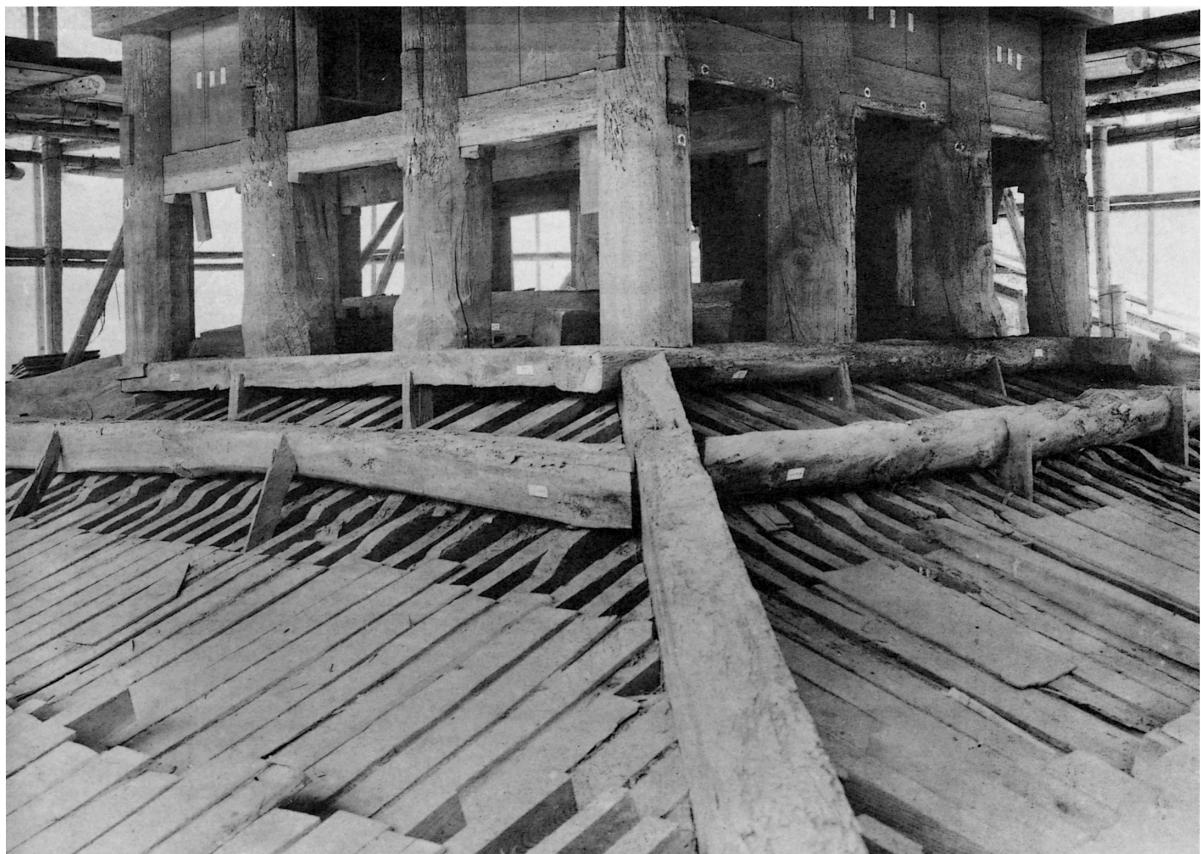
42 解体 二重野極

四隅の配付極に各3本当初のものと見られる極が残存していた。約5.1粍角の松材で曲手に金斧はつり、他の2面は挽肌で野地木舞の当り跡、留釘穴も残っていた。その他のものは5.1粍の杉換立材で野隅木とともに大正9年に新補されたものであった。



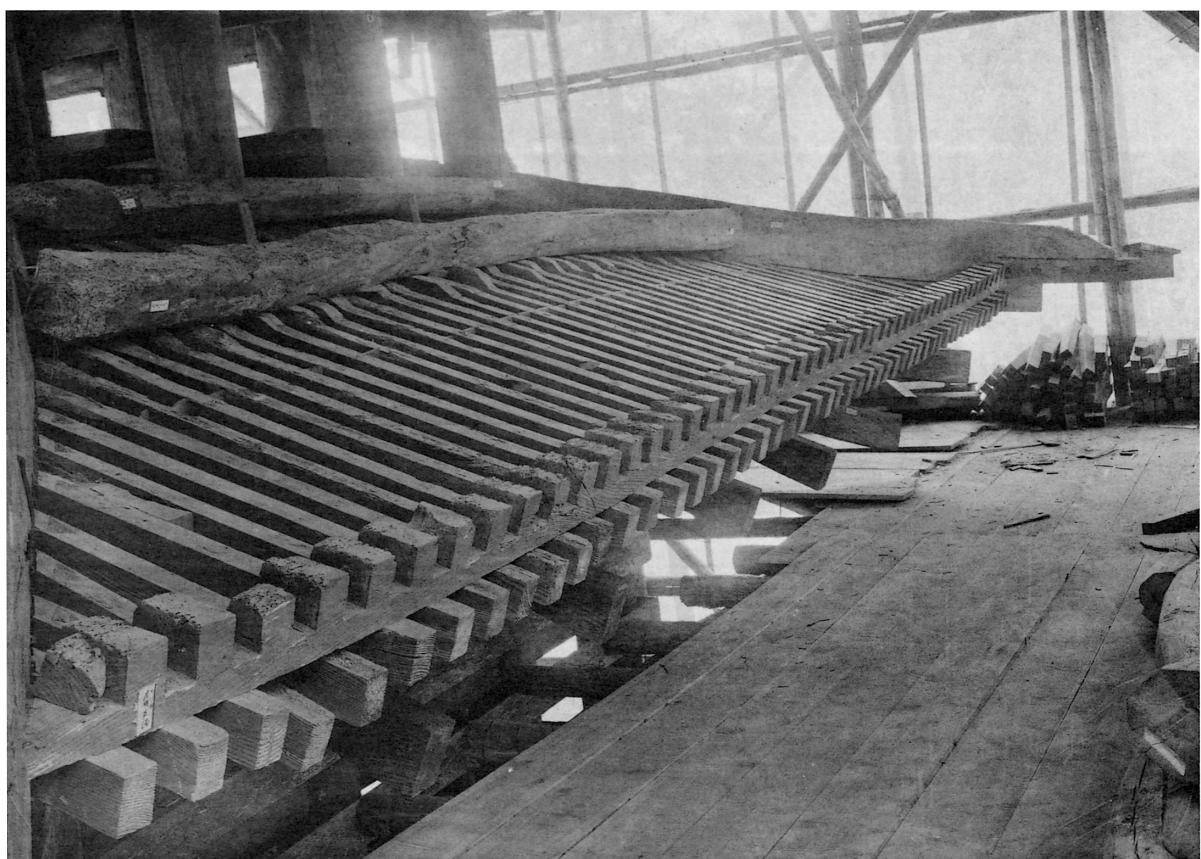
43 解体 二重小屋組

腰組束、桔木、野隅木とともに大正修理に取替えられたものである。腰組束枕には東面に飛擔部分を切断された旧三重の化粧木と西面に旧左儀長束2本が転用されていた。



44 解体 二重化粧裏板

地樋の裏板は当初のもので、飛擔裏板は後補のものであった。



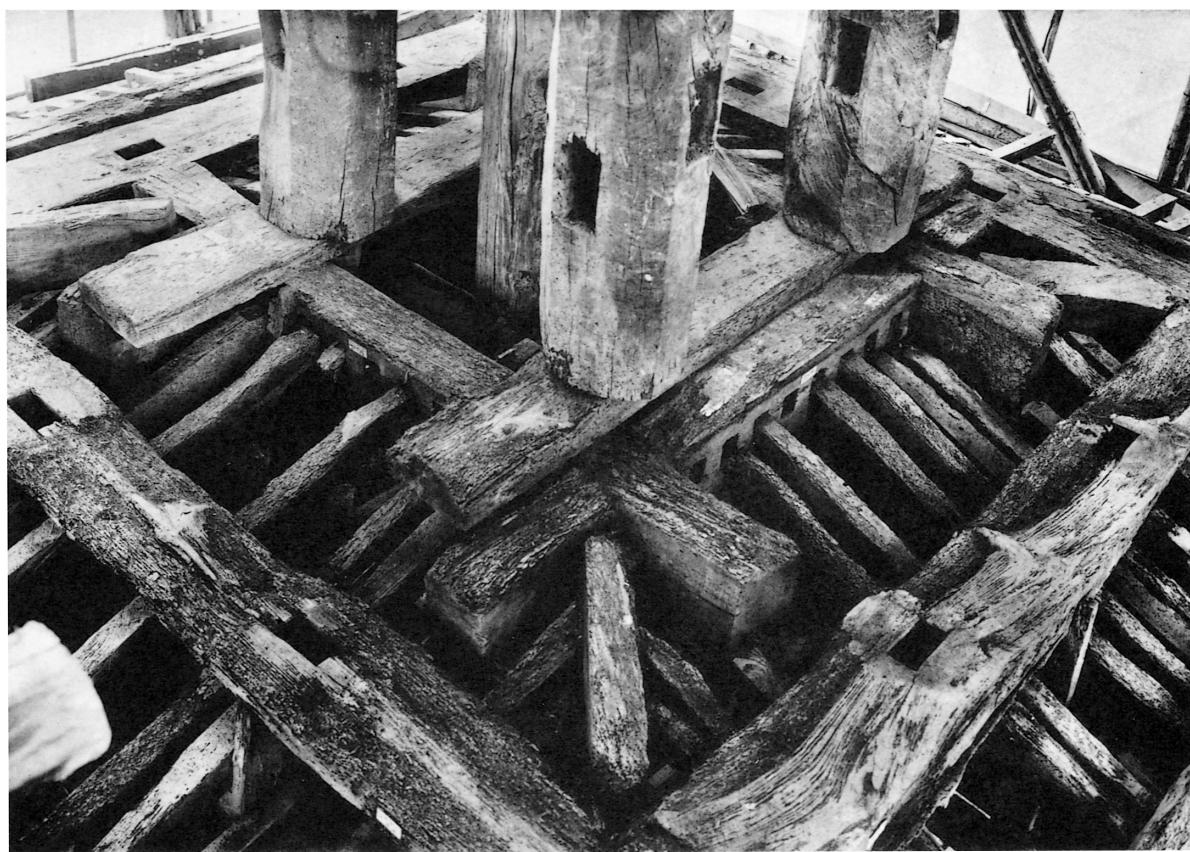
45 解体 二重木負

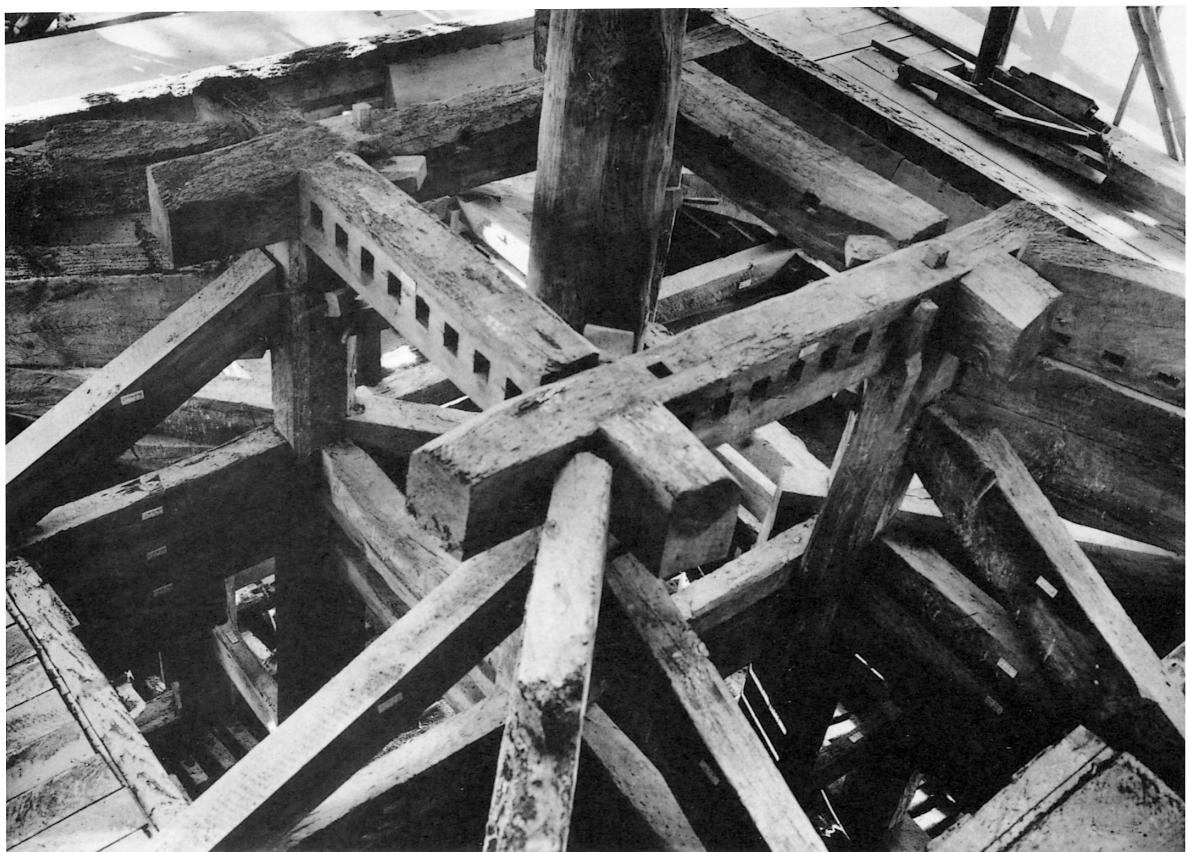
木負は東面中央部16支、南面東より18支が取替えられていたが、その他は初のもので、打替えられた痕跡もなかった。

各面とも地樋はすべて当初のものであつたが、飛擔樋は全部取替えられていた。  
化粧隅木は西面両隅は当初のもので、東面両隅は飛擔部分が先継されていた。



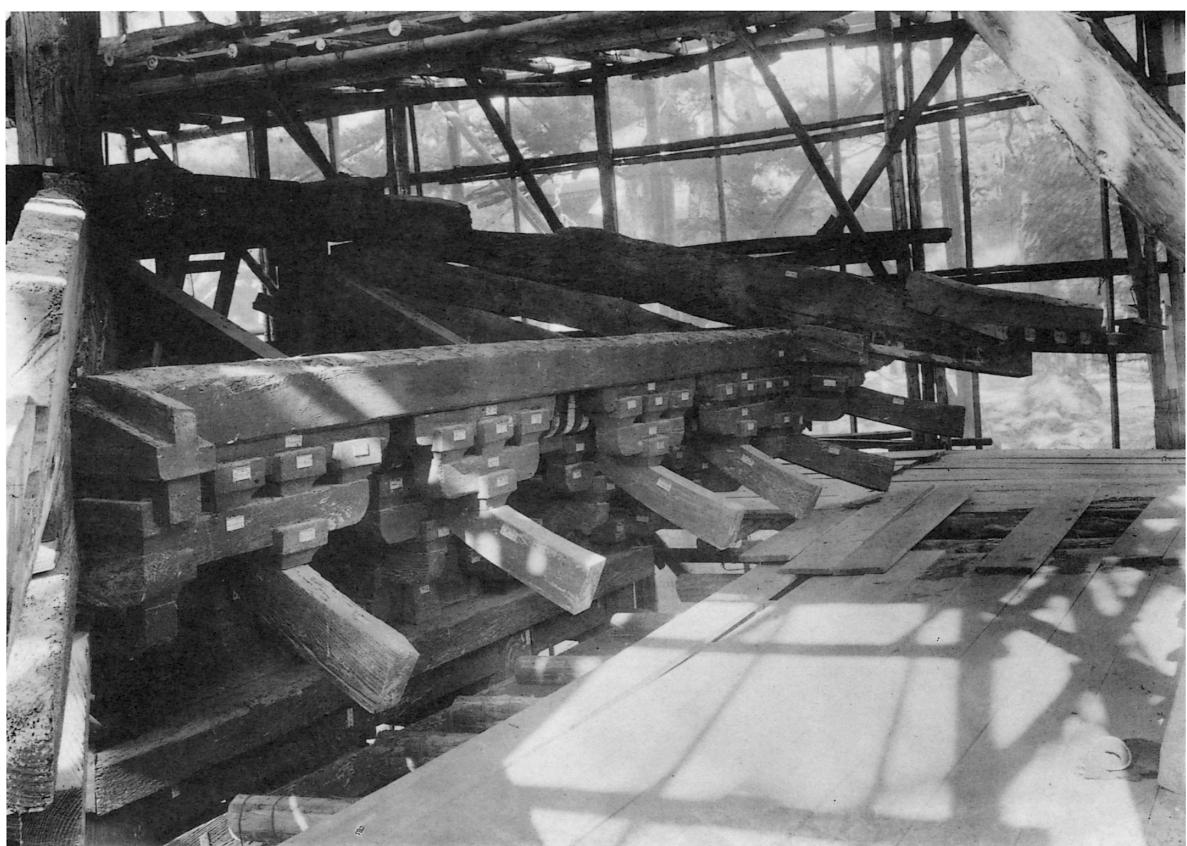
四天東、東台とも当初のもので、東台は甚だしく腐朽していた。





48 解体 二重 檼掛

檼掛の上端面の腐蝕が大きかったが、他面は比較的良好であった。当初のもので松材。



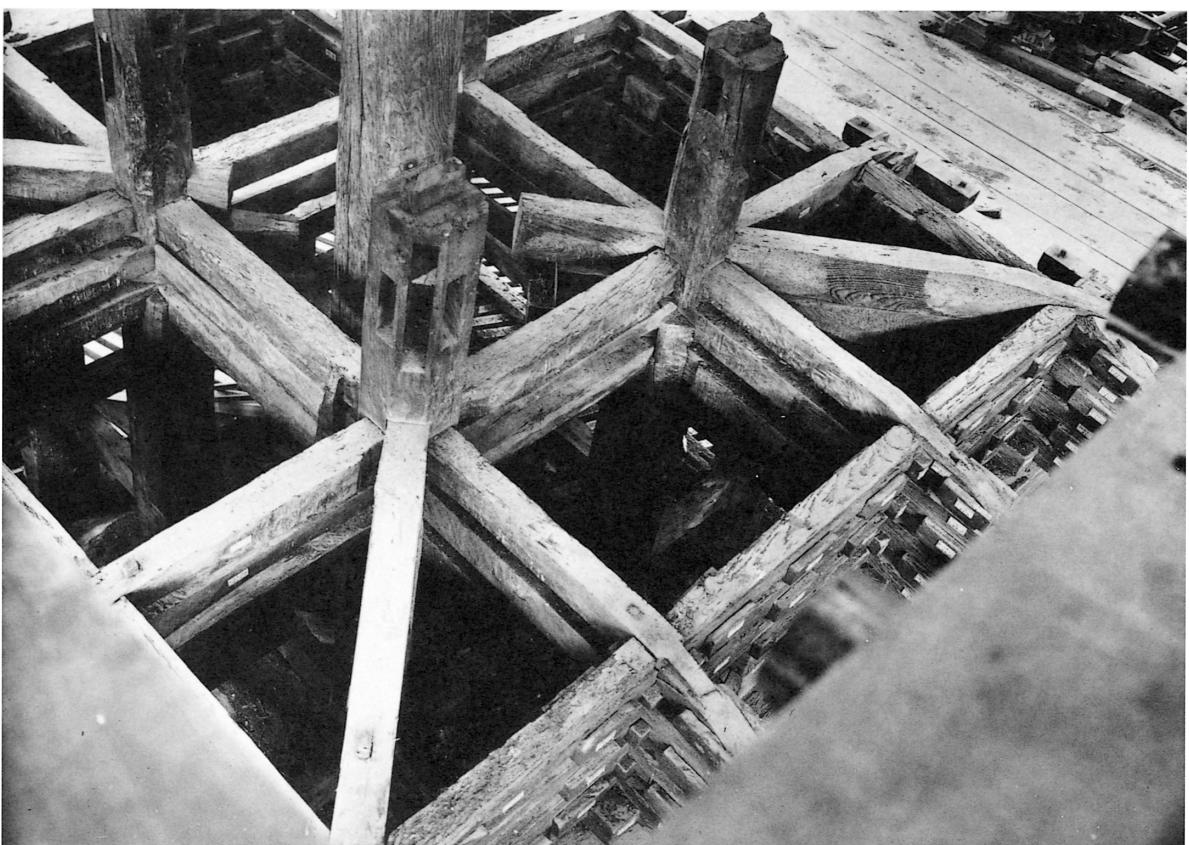
49 解体 二重 斗 桁

大斗、巻斗は楠材、その他は松材ですべて当初のものである。巻斗及び通肘木に慶長14年申7月9日及び鈴木久三郎の墨書があった。



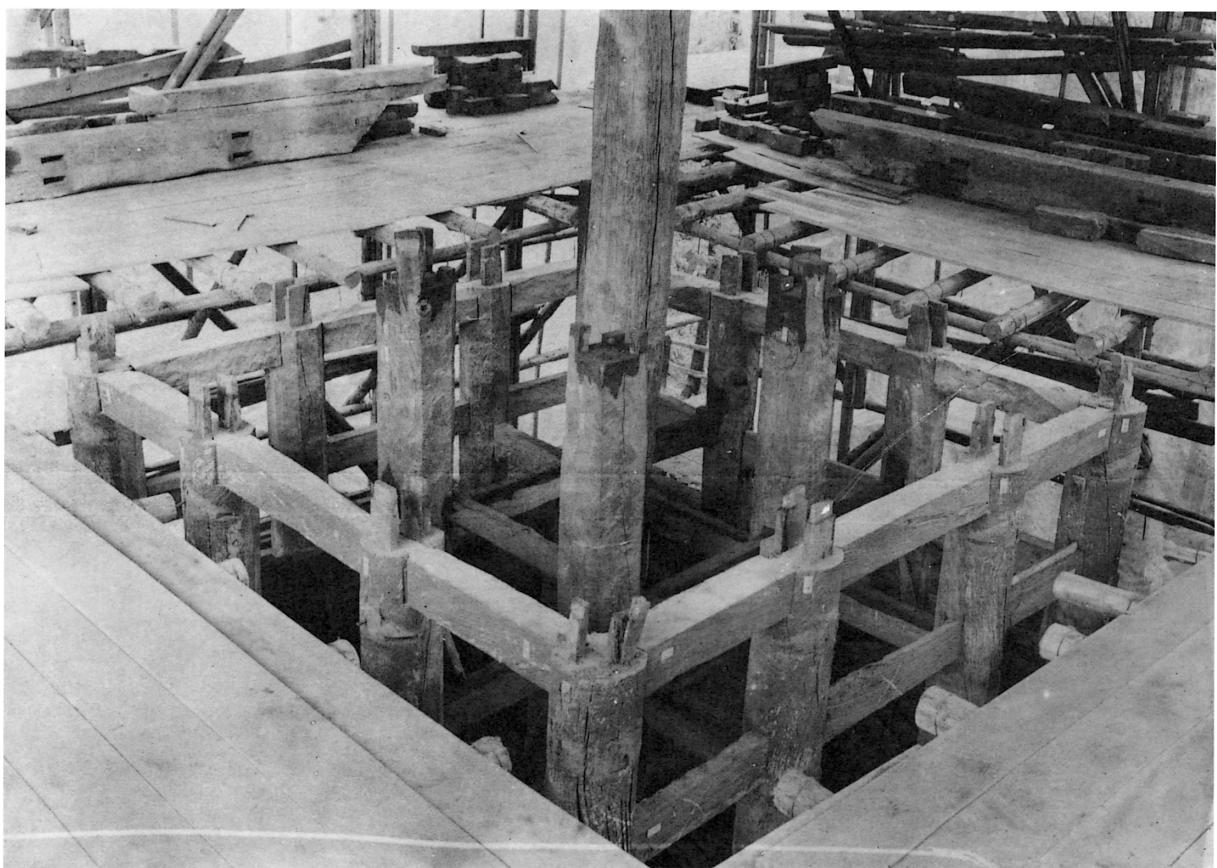
50 解体 二重尾桿

東面中央2本は大正修理に取替えられていたが、その他は当初のもので腐朽が著しかった。



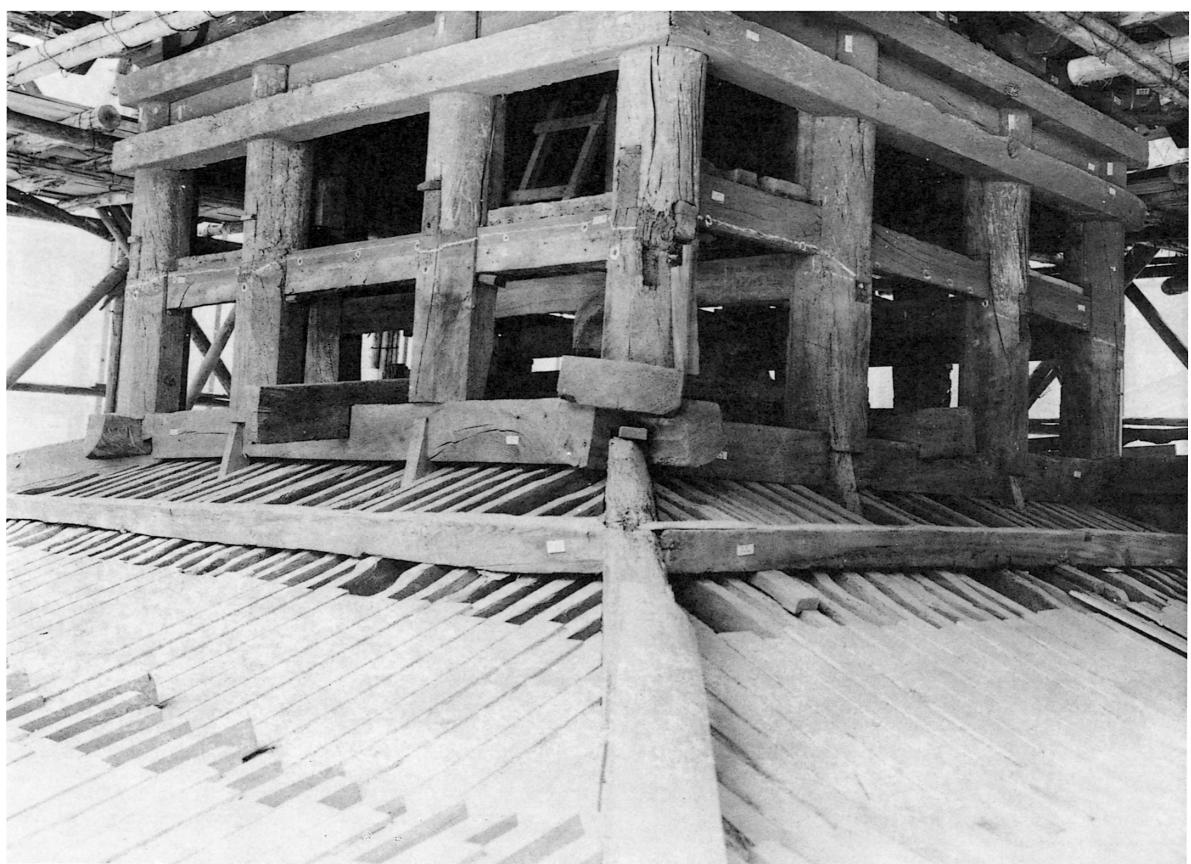
51 解体 二重通肘木

肘通木と尾桿組手仕口は胴付だほ入れになっていた。



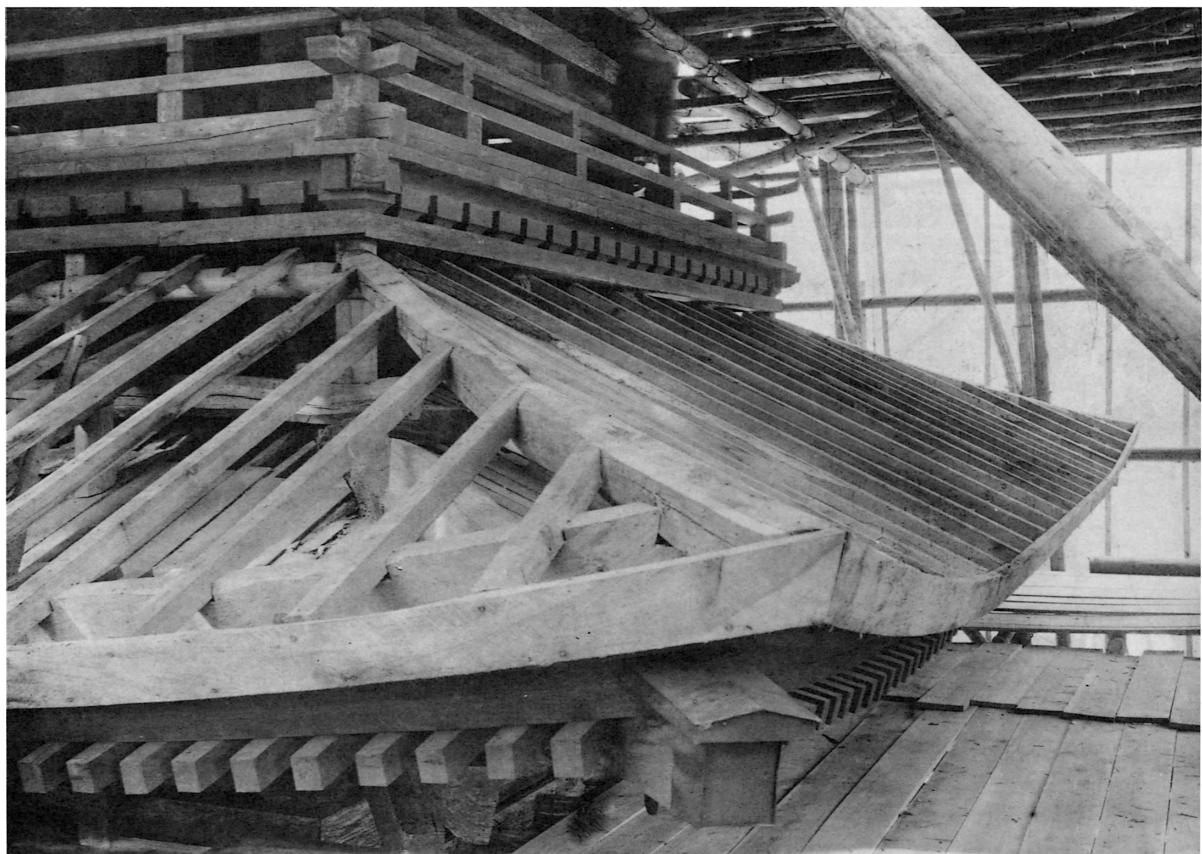
52 解体 二重軸部 (其の1)

柱頭納は台輪を通し大斗に2枚納入れになっていた。



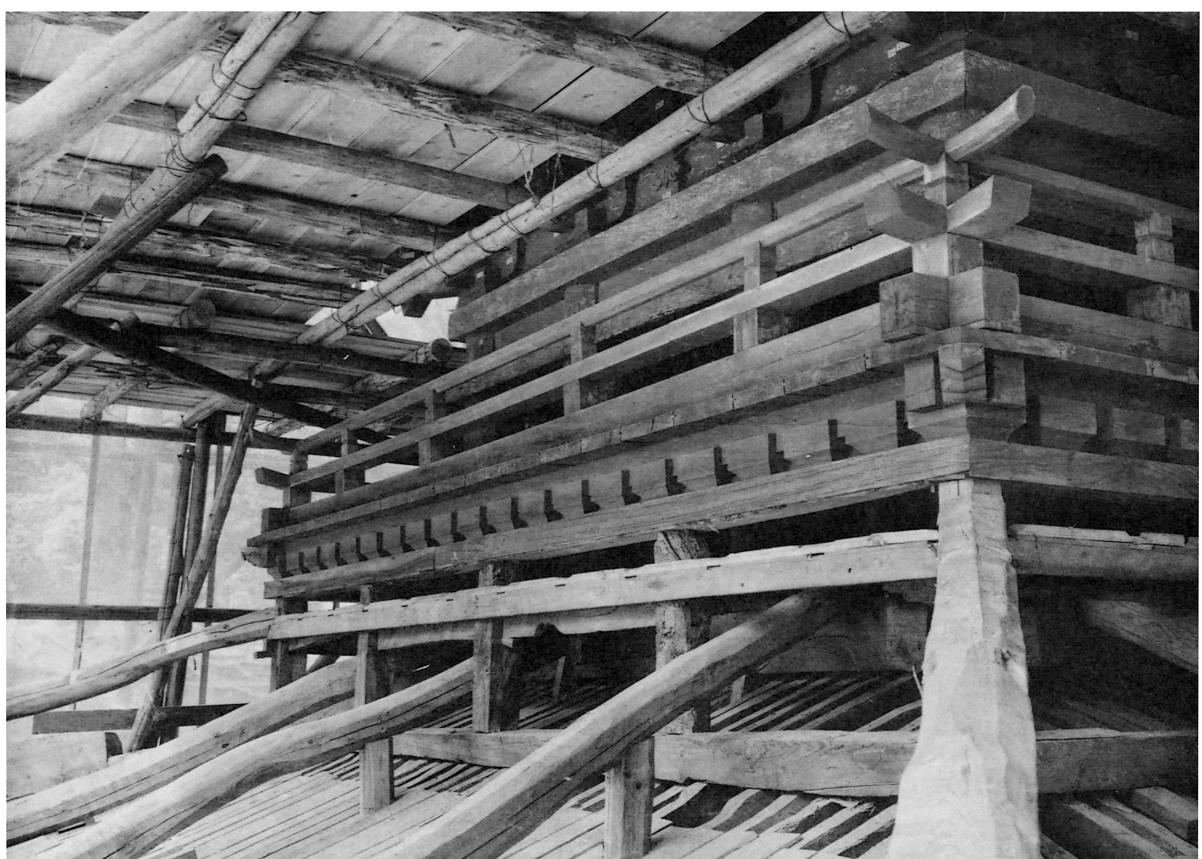
53 解体 二重軸部 (其の2)

軸部、長押ともすべて当初のもので松材である。柱露出面の風化は大きく東面柱脚部の腐朽は甚だしかった。



54 解体 一重野樋

野樋及び野地板ともすべて大正修理に取替えられていた。



55 解体 一重小屋組及腰組

桔木、母屋、東とも大正修理にて取替えられたもので、鼻母屋には旧茅負が転用されていた。

腰組の巻斗86ヶの内25ヶは当時のもので東面及び南面東寄りに使用されていたが、その他のものはすべて前記修理時に取替えられたものであった。



56 解体 一重軒廻

茅負、飛擔樋はすべて大正修理時取替えられたものであったが、地樋は8本  
新補されているだけで、他は当初のもので木負は約1/2が取替えられていた。



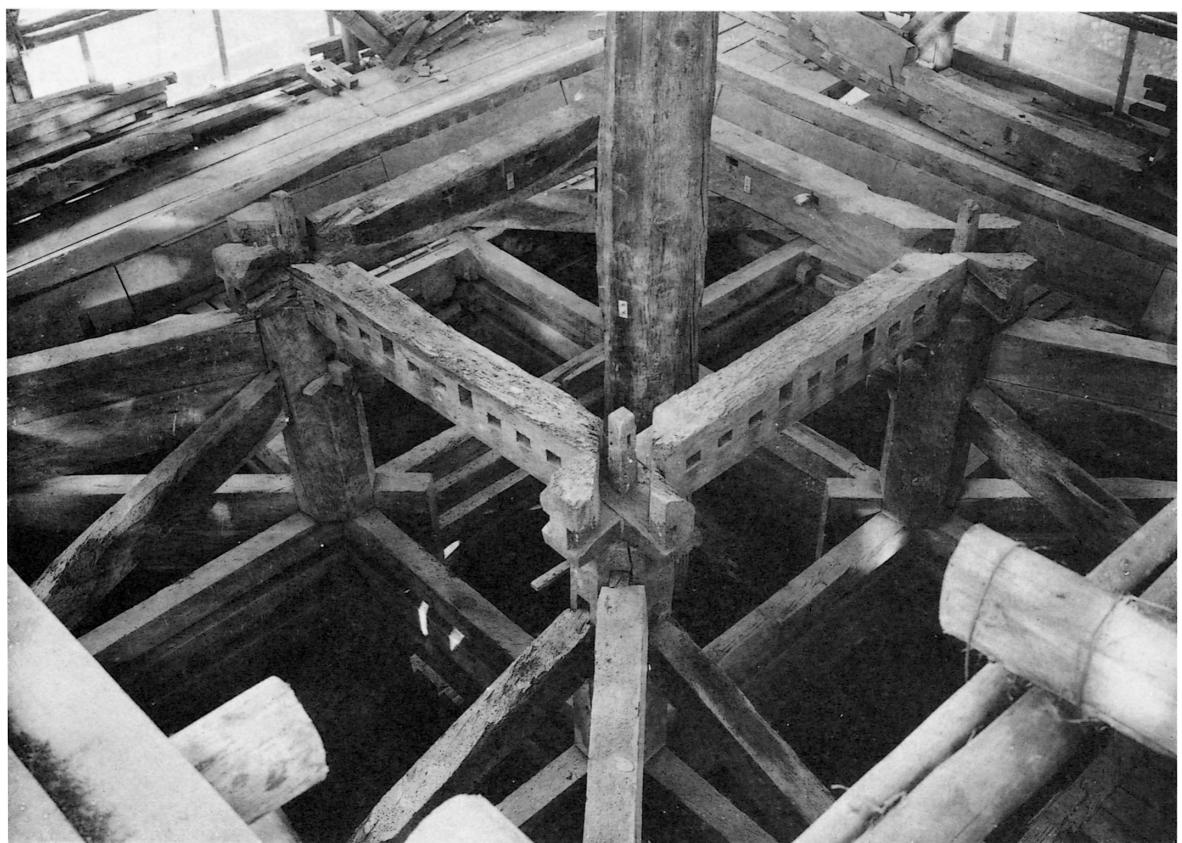
57 解体 心柱 受梁

受梁は西南隅より東北隅に架構してあり、四天束、樋掛とも松材で当初のも  
のである。



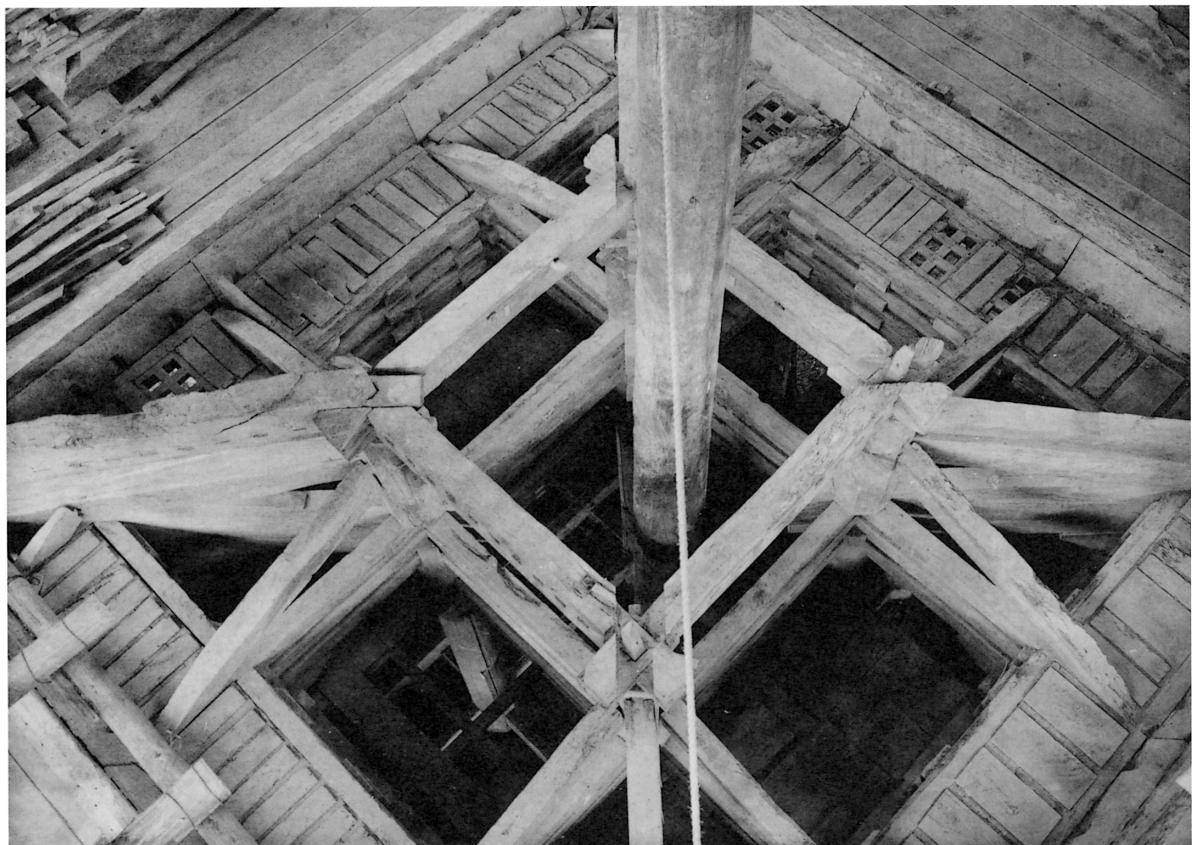
58 解体 一重土居桁及腰組束枕

土居桁は当初のもので、束枕は後補のもので、いづれも松材である。



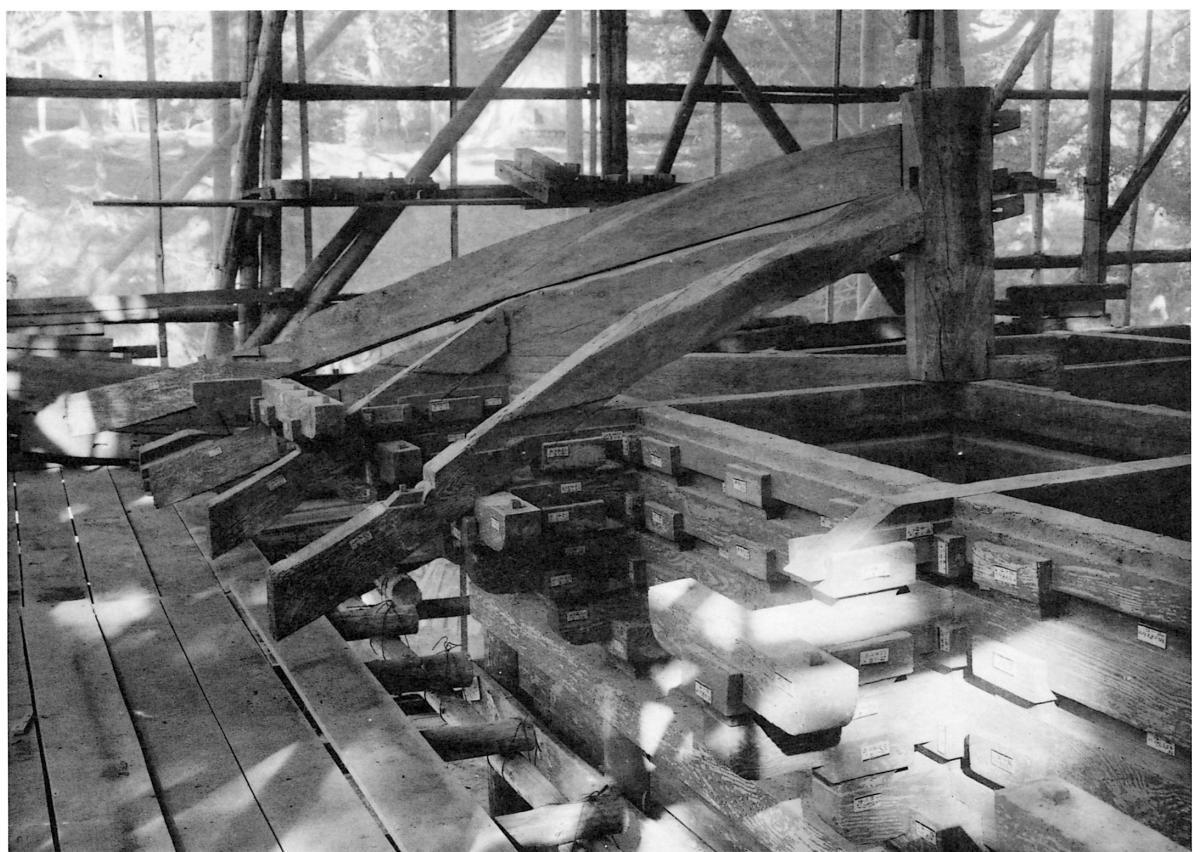
59 解体 一重 横掛

各面とも中2本の横尻を突通し鼻栓打ちにしてあった。



60 解体 初重隅木尻

初重の隅木尻は四天束枠に差し鼻栓打ちになっている。



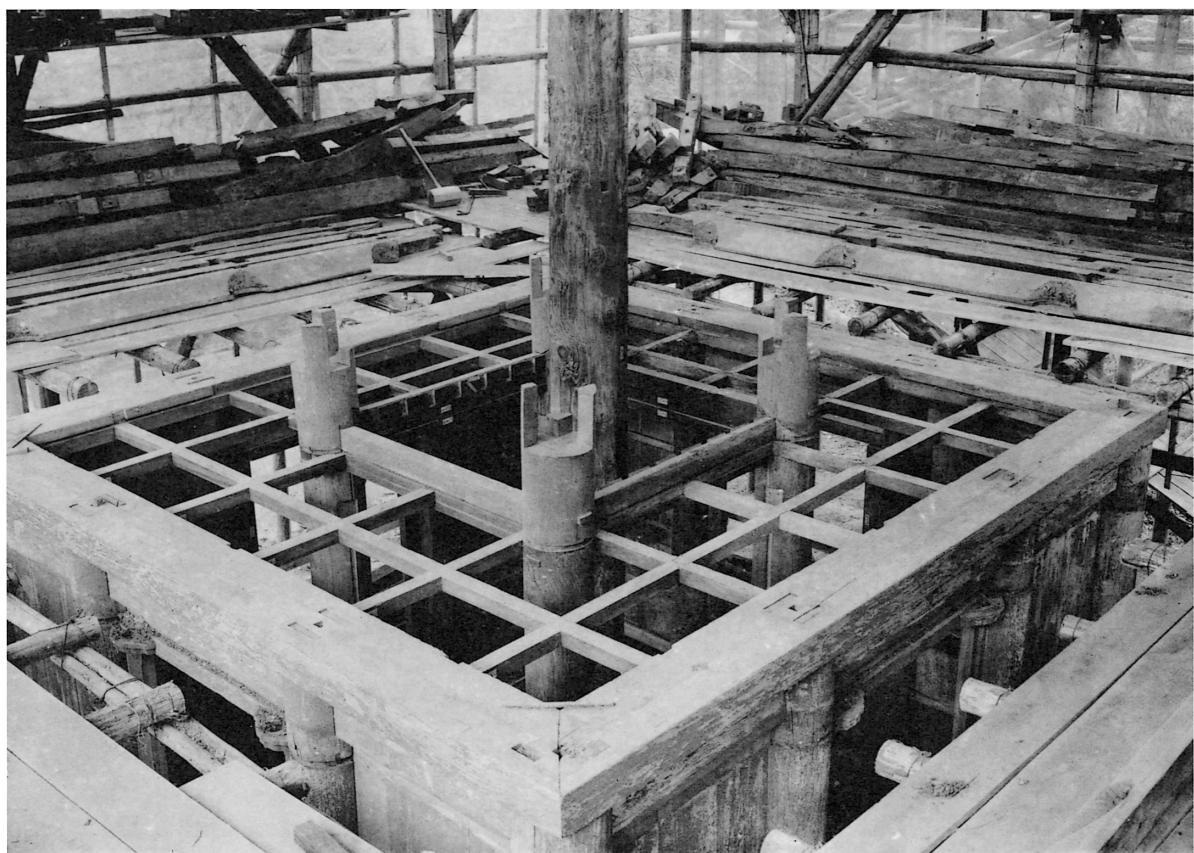
61 解体 初重尾樋

初重尾樋は柱真上にへの字形に木枠りにされ、尾樋尻は四天束に枠差し、鼻栓打ちにしてあった。尾樋はすべて当初のもので松材である。



62 解体 初重斗栱

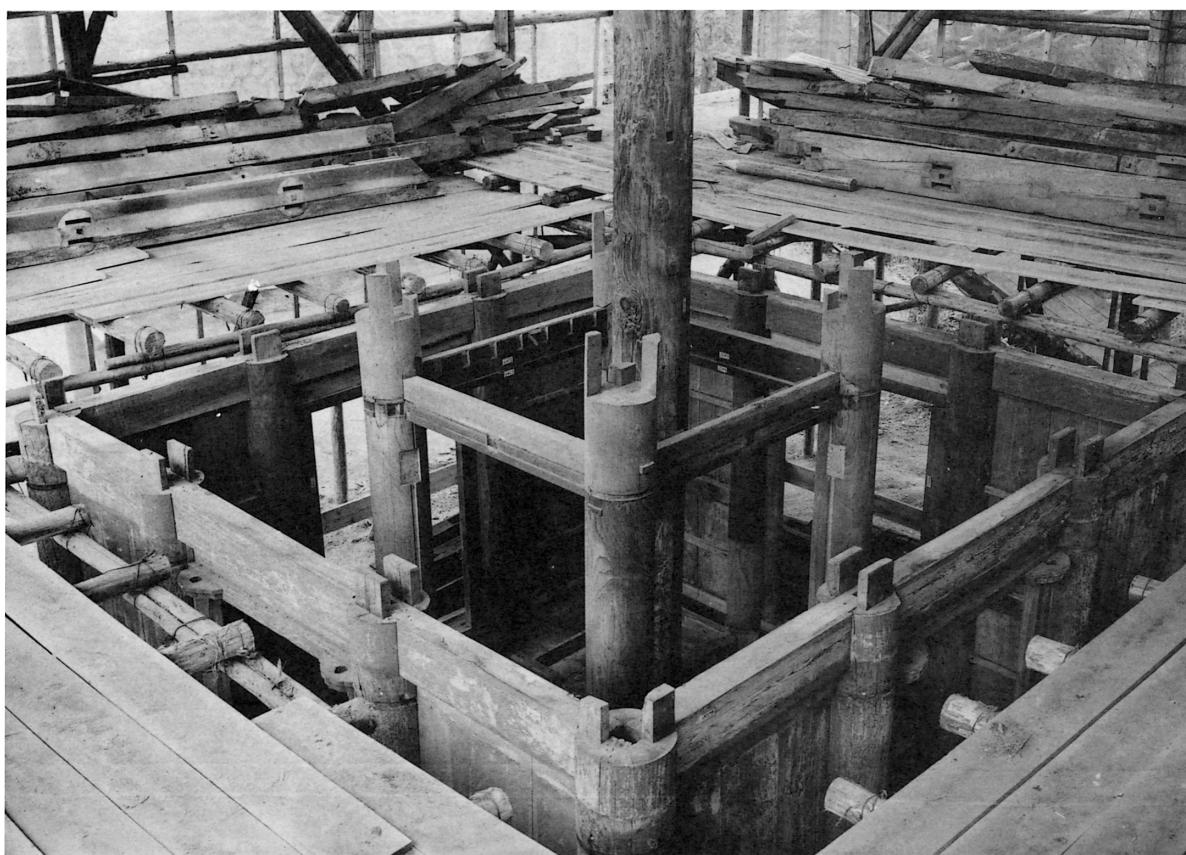
斗栱はすべて当初のもので松材、通肘木と尾樋組手は斜突付の簡単な仕口であった。



63 解体 初重台輪及天井格縁

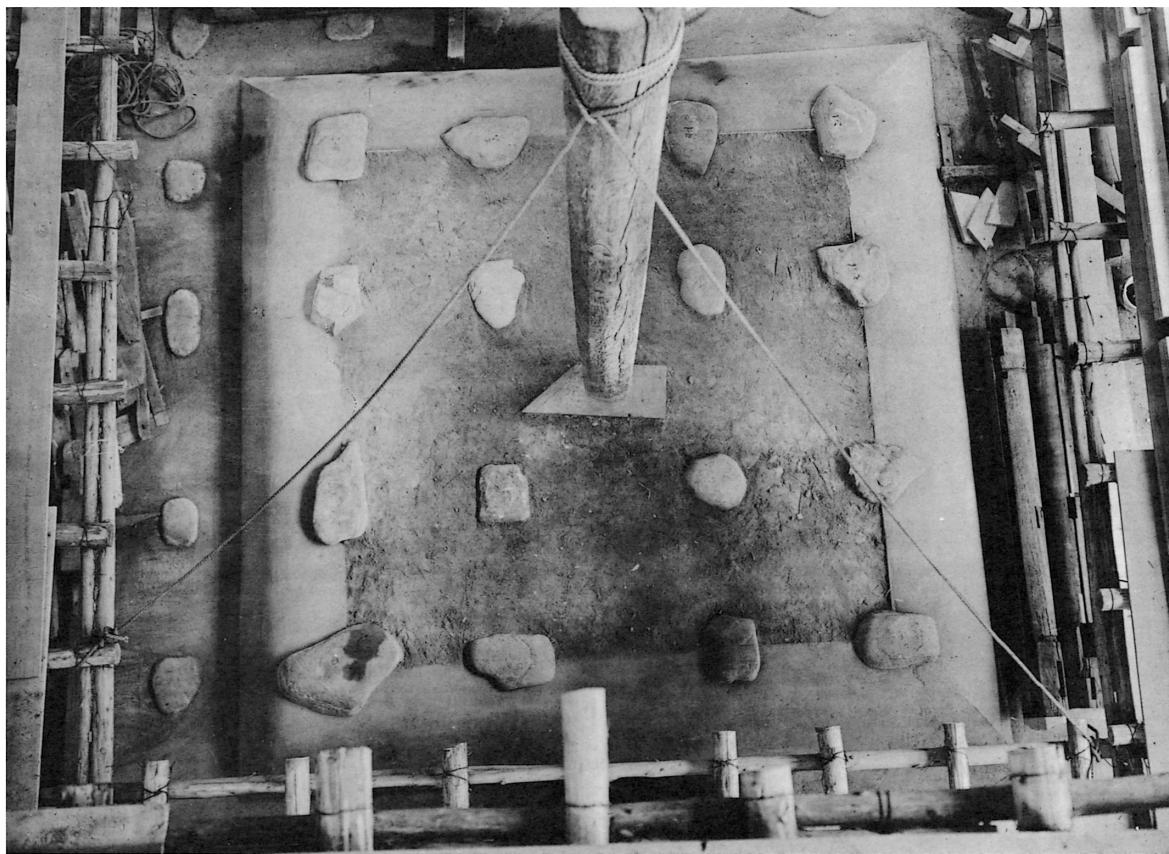
台輪は柱に2枚枘差、天井格縁は台輪と四天柱飛貫に大入れ、いづれも当初の松材である。

初重頭貫  
頭貫は平柱には輪薙込み、隅柱には大入れになつており、  
台輪にて固定していた。



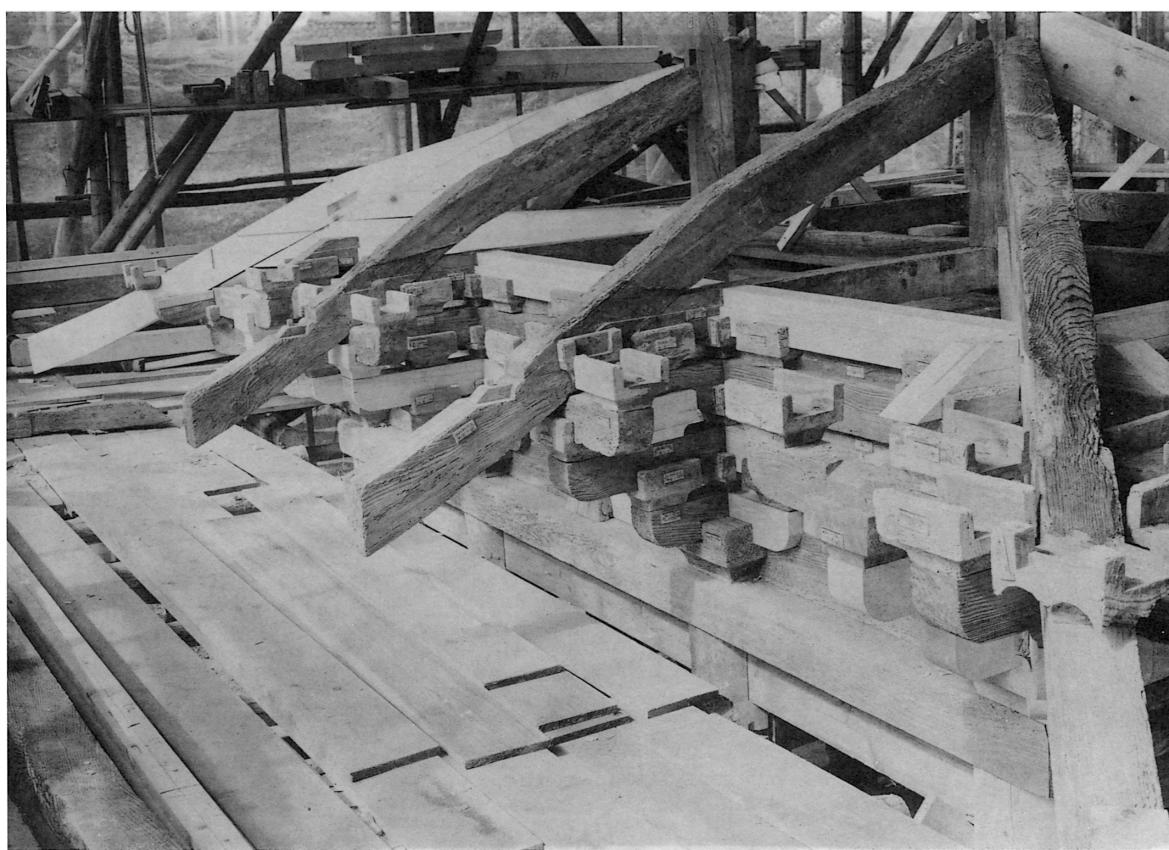
初重軸部  
側柱は椎材で四天柱は檜材になつていた。いづれも当初のもので東面中央二  
本は宝曆年間に根継されていたほか、側柱五本の石口には飼物が施されていた。



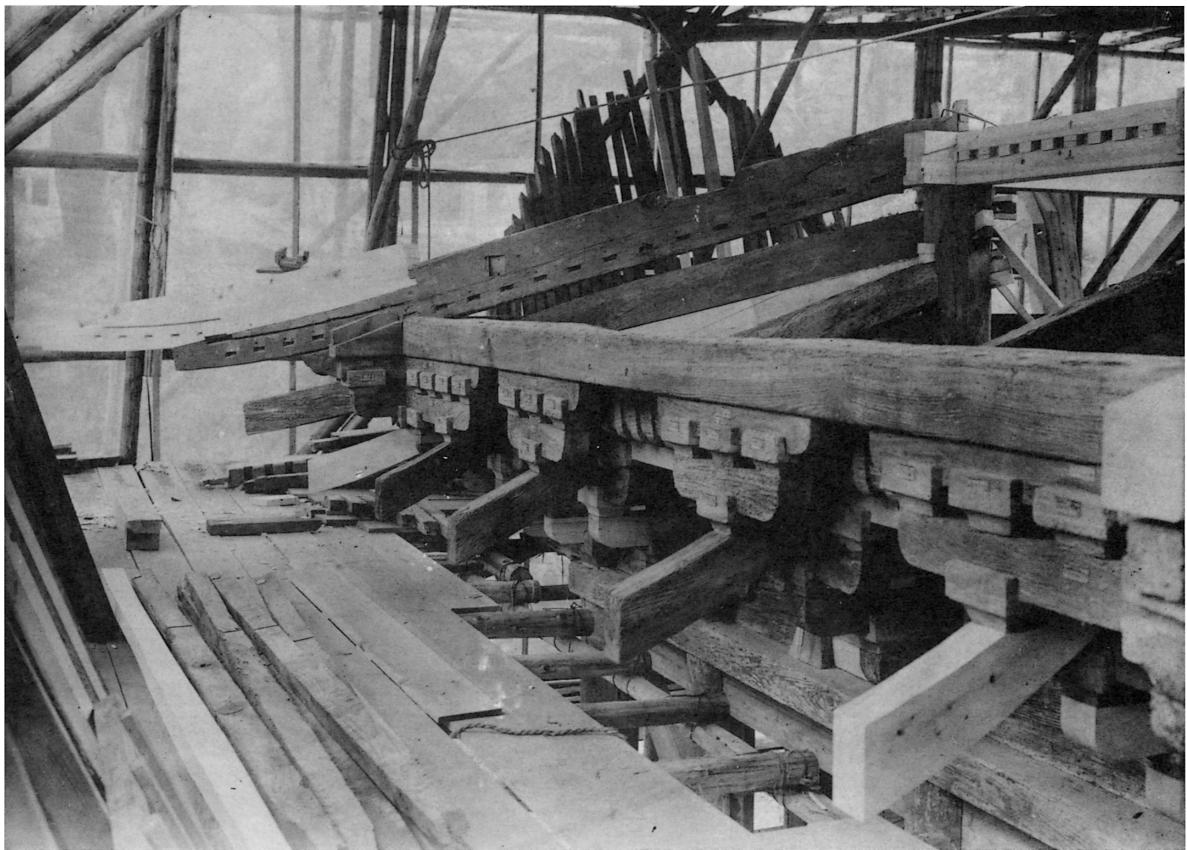


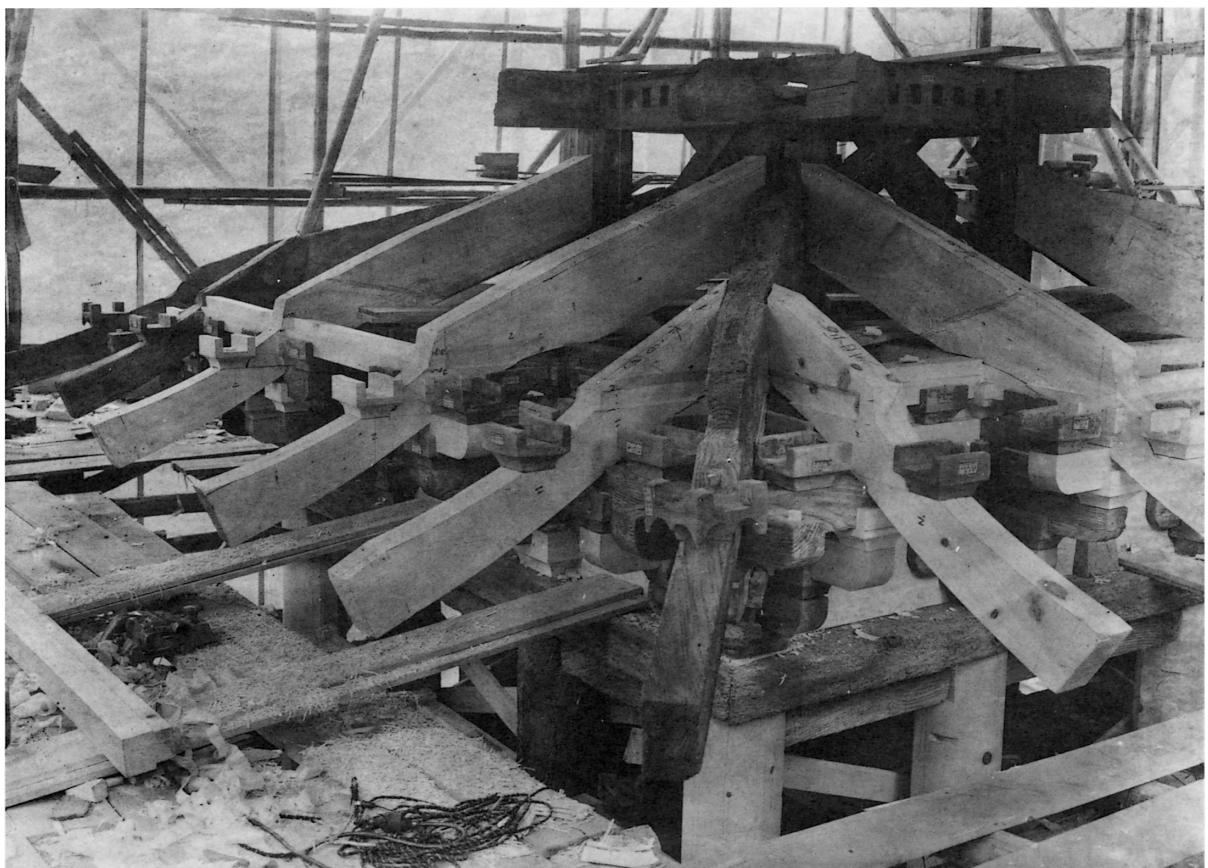
66 組立 磁 石

柱石は布堀コンクリート地業の上に据え付け、縁東石は壺堀コンクリート地業の上に据え付けた。



67 組立 初重斗栱



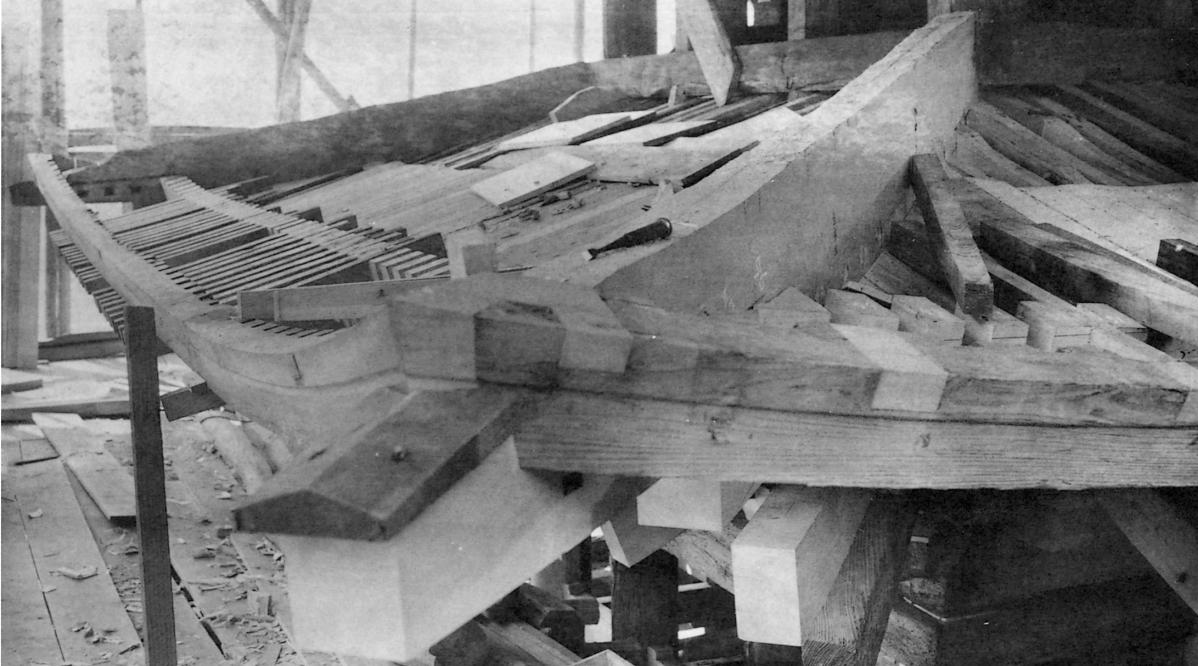


70 組立 二重斗桟

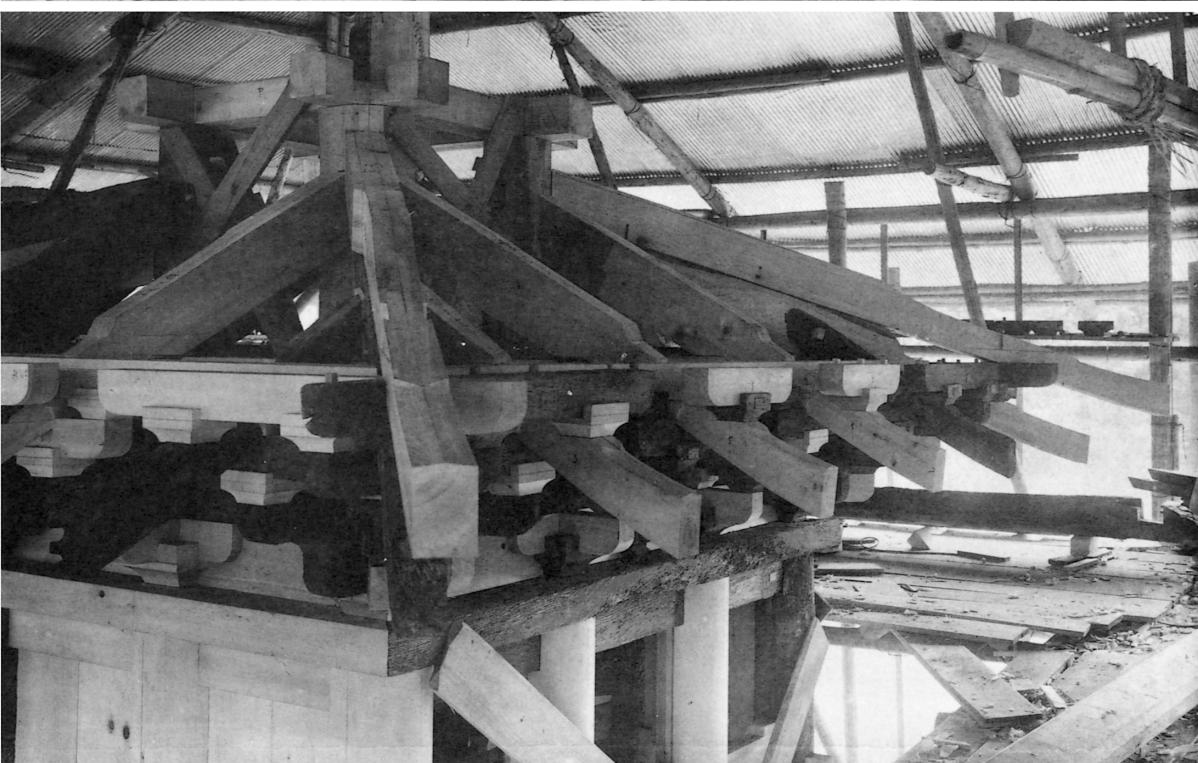


71 組立 二重桁廻

二重軒廻  
発見の旧茅負を再用する。



三重斗栱



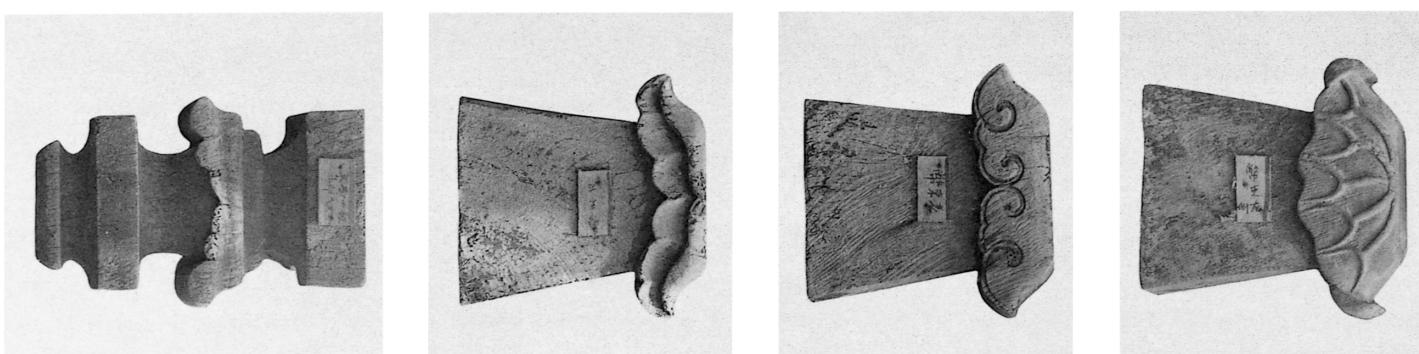
三重桁廻





83 三重隅木持送

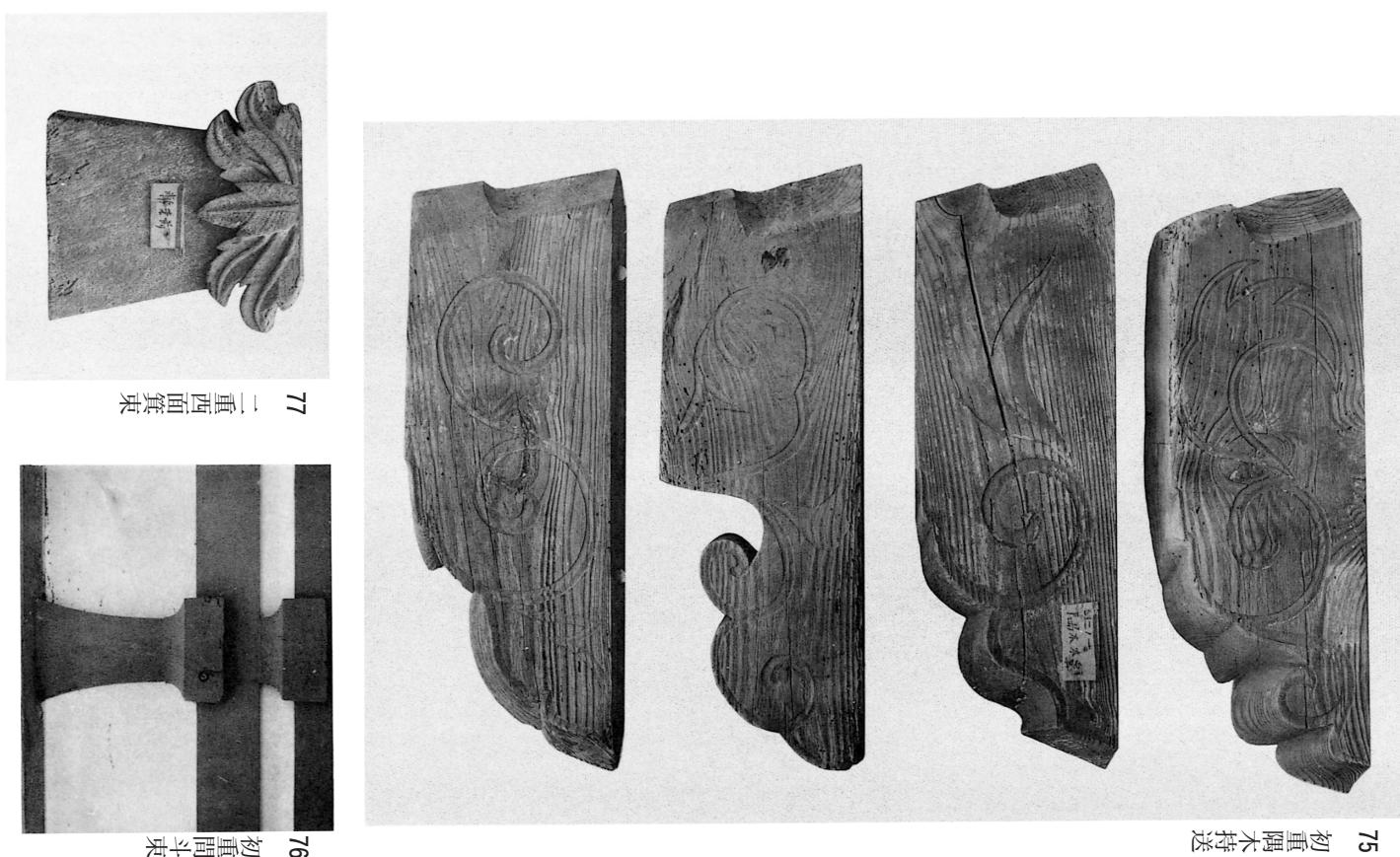
82 一重隅木持送



79 二重北面箕束

80 二重東面箕束

81 二重箕束

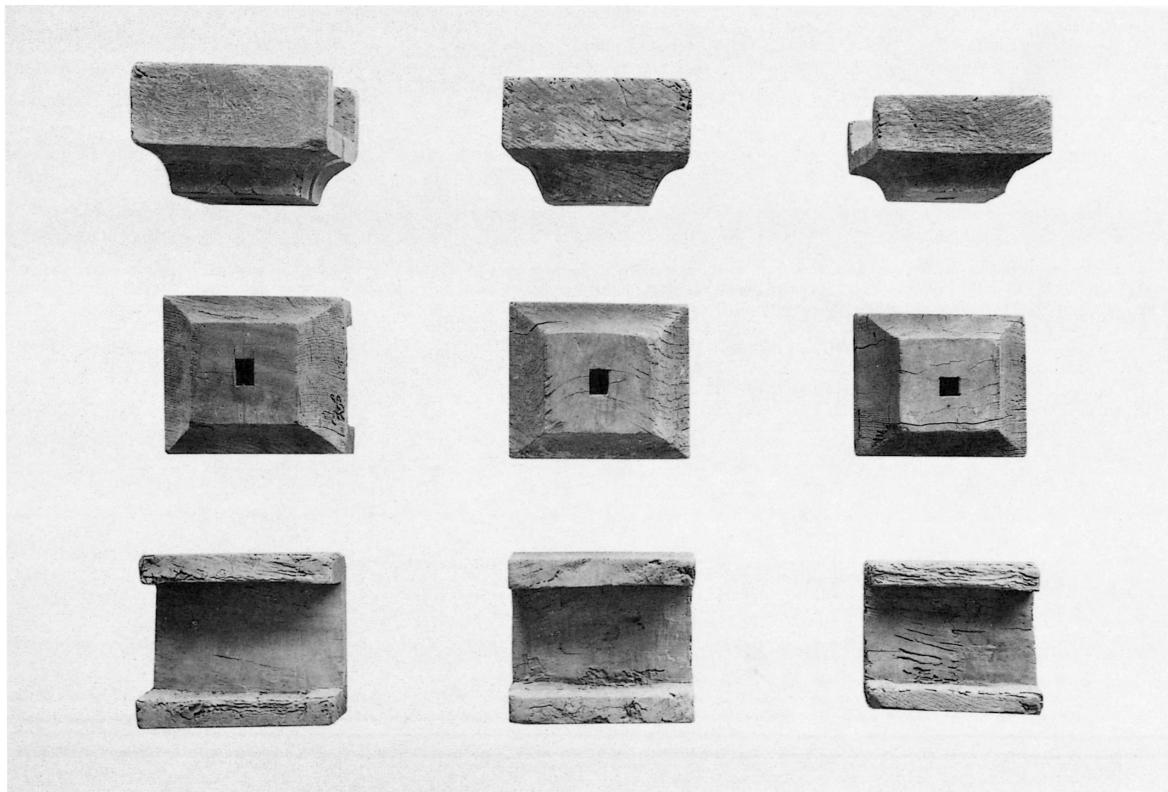


85 初重隅木持送

86 初重間斗束

87 初重間斗束

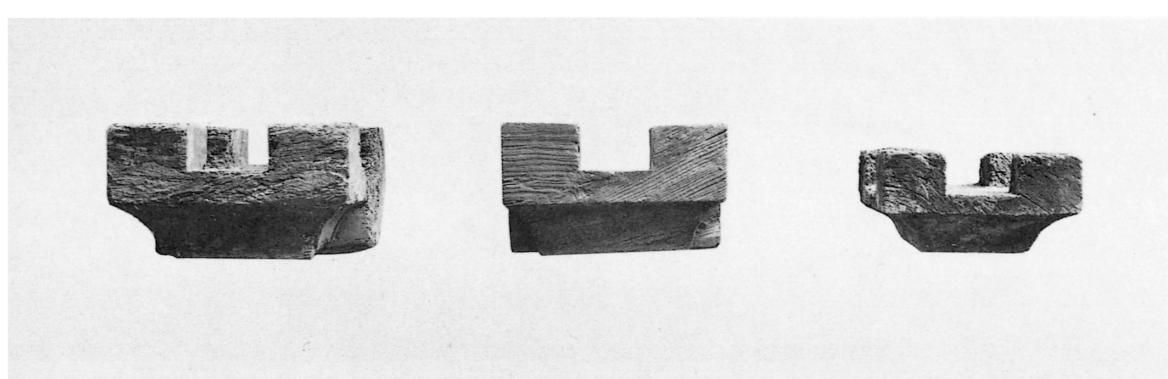
88 初重間斗束



初重卷斗

二重卷斗

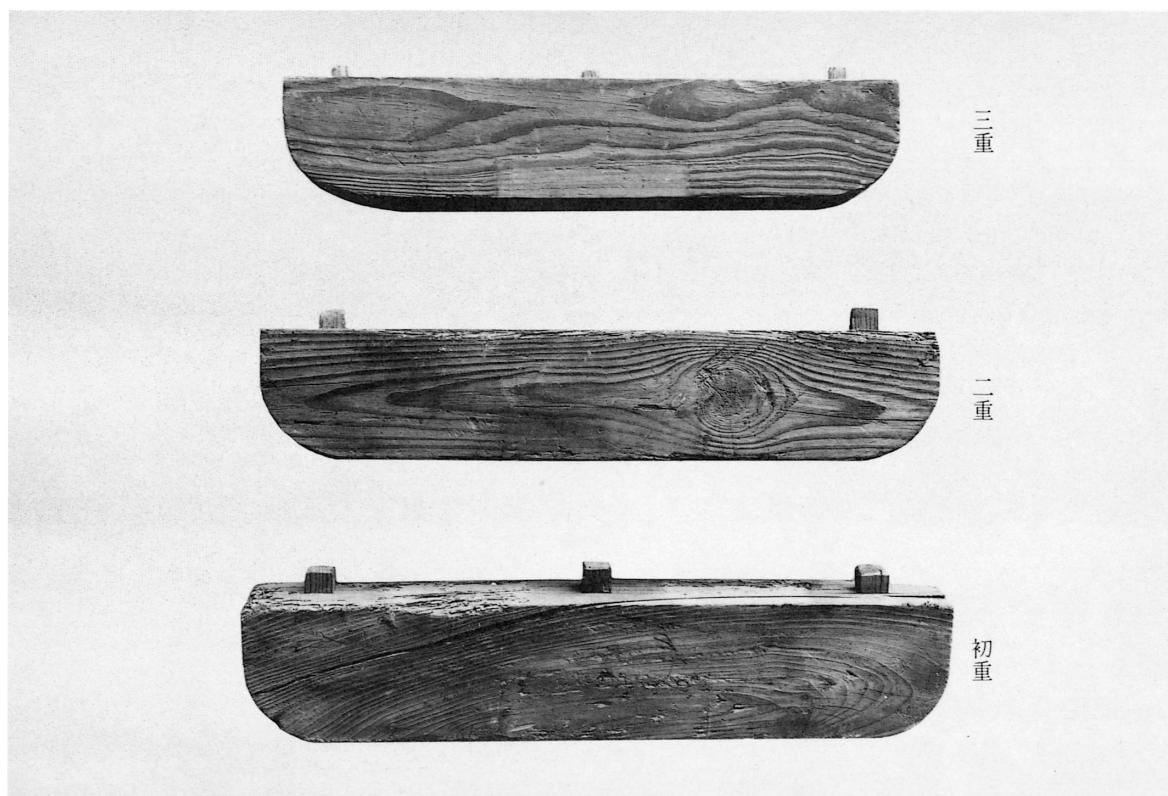
三重卷斗



初重大斗

二重大斗

三重大斗



三重

二重

初重

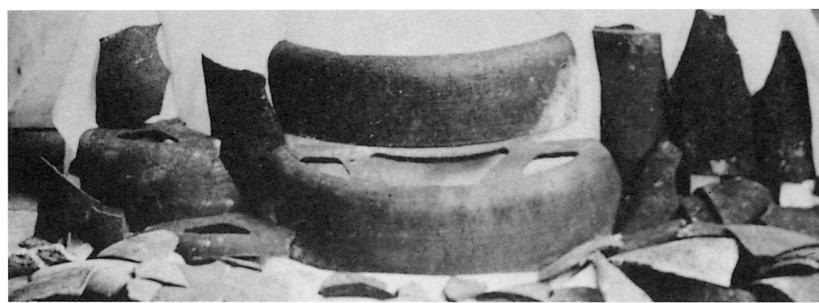
88

保存されていた宝珠、竜車



89

保存されていた九輪



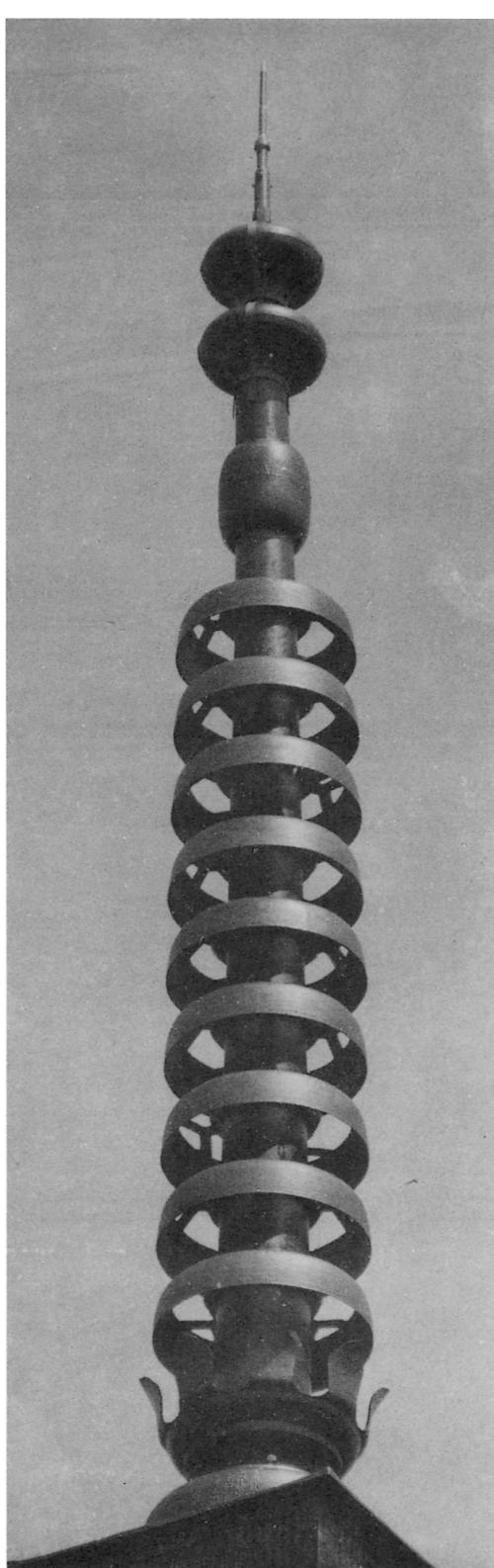
90

請花、伏鉢



92

露盤



87 組立相輪

91 風 鐸



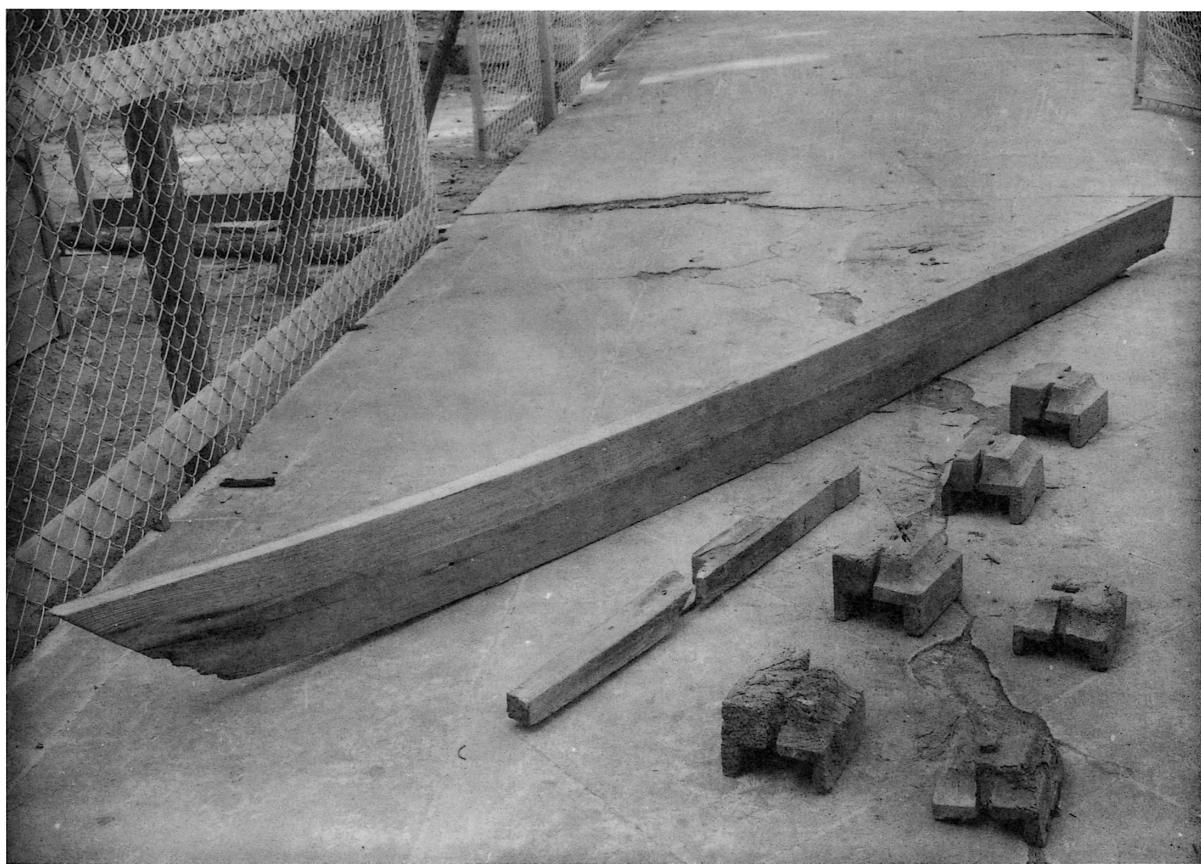
93

資料 一重の鼻母屋に転用されていた旧茅負



94

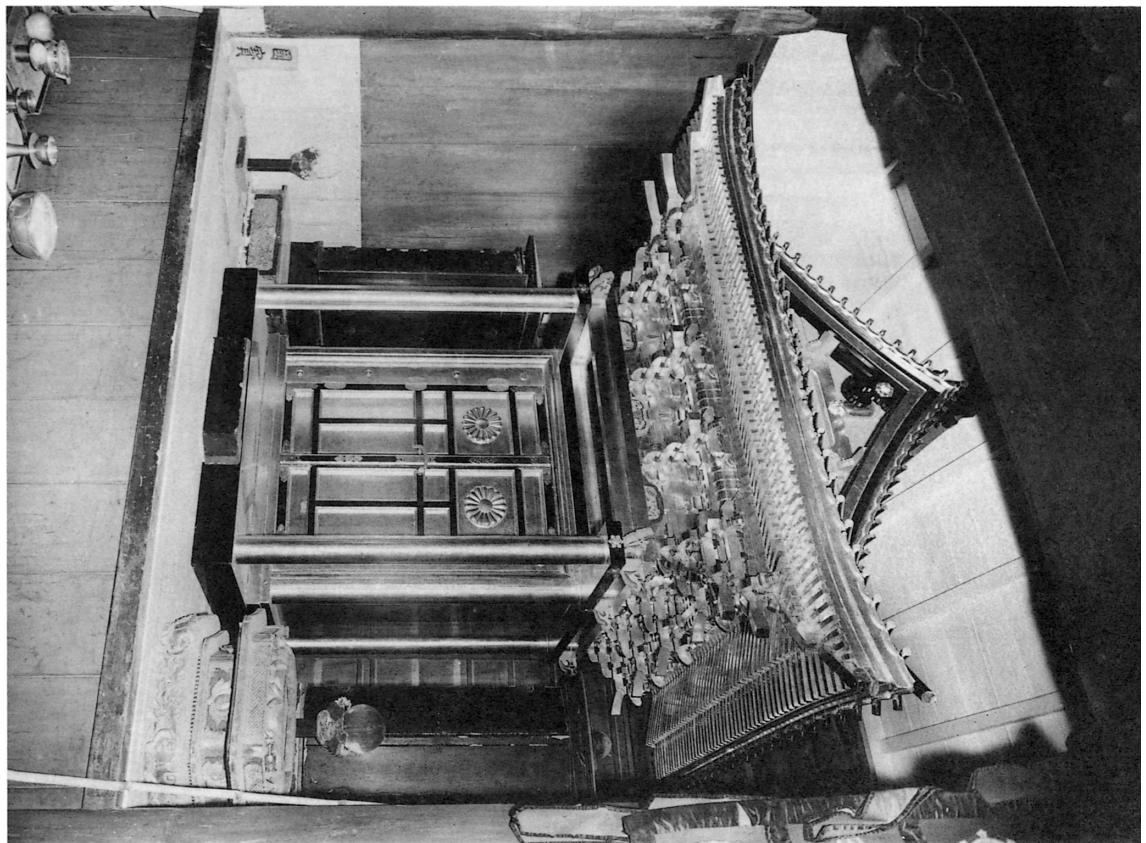
資料 旧裏甲、巻斗、飛擔桿



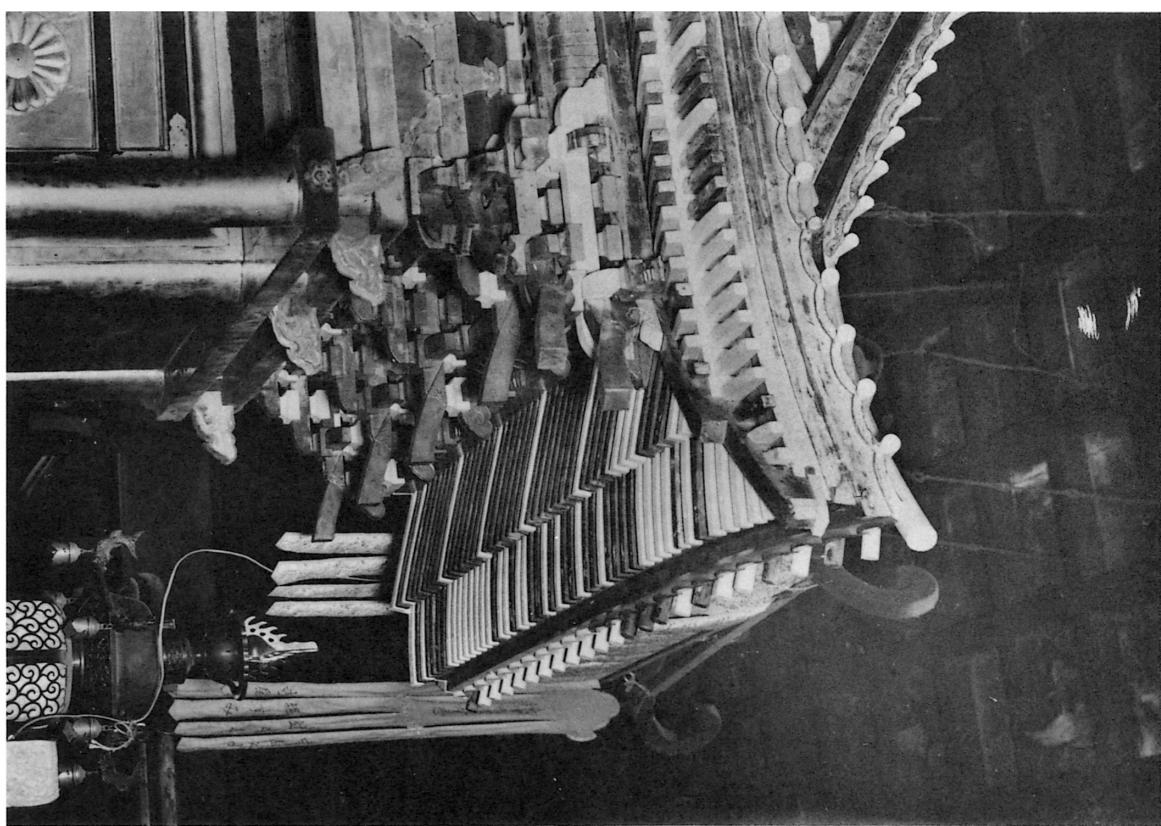
飛擔桿は野桿に転用されていた。裏甲、巻斗は二重東側の小屋内に保管されていた。



96 燈工 正侧面



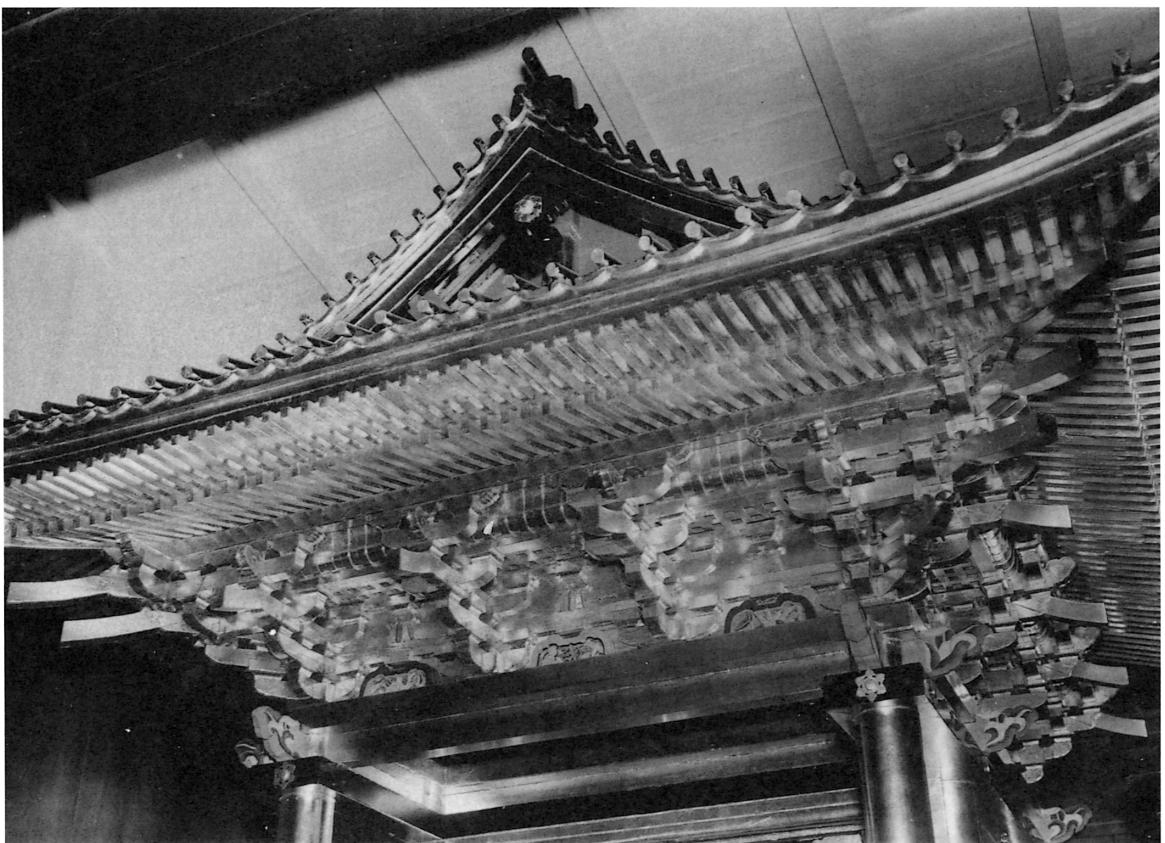
97 燈工 軒註細



98

竣工

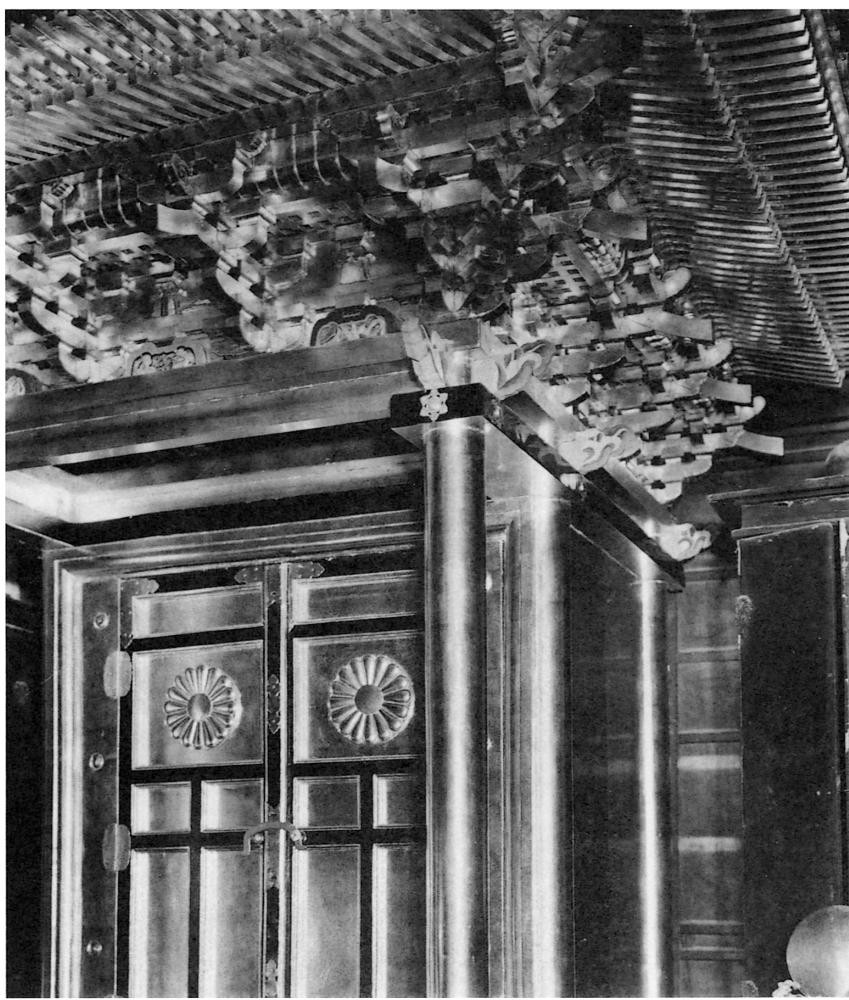
正面軒廻詳細

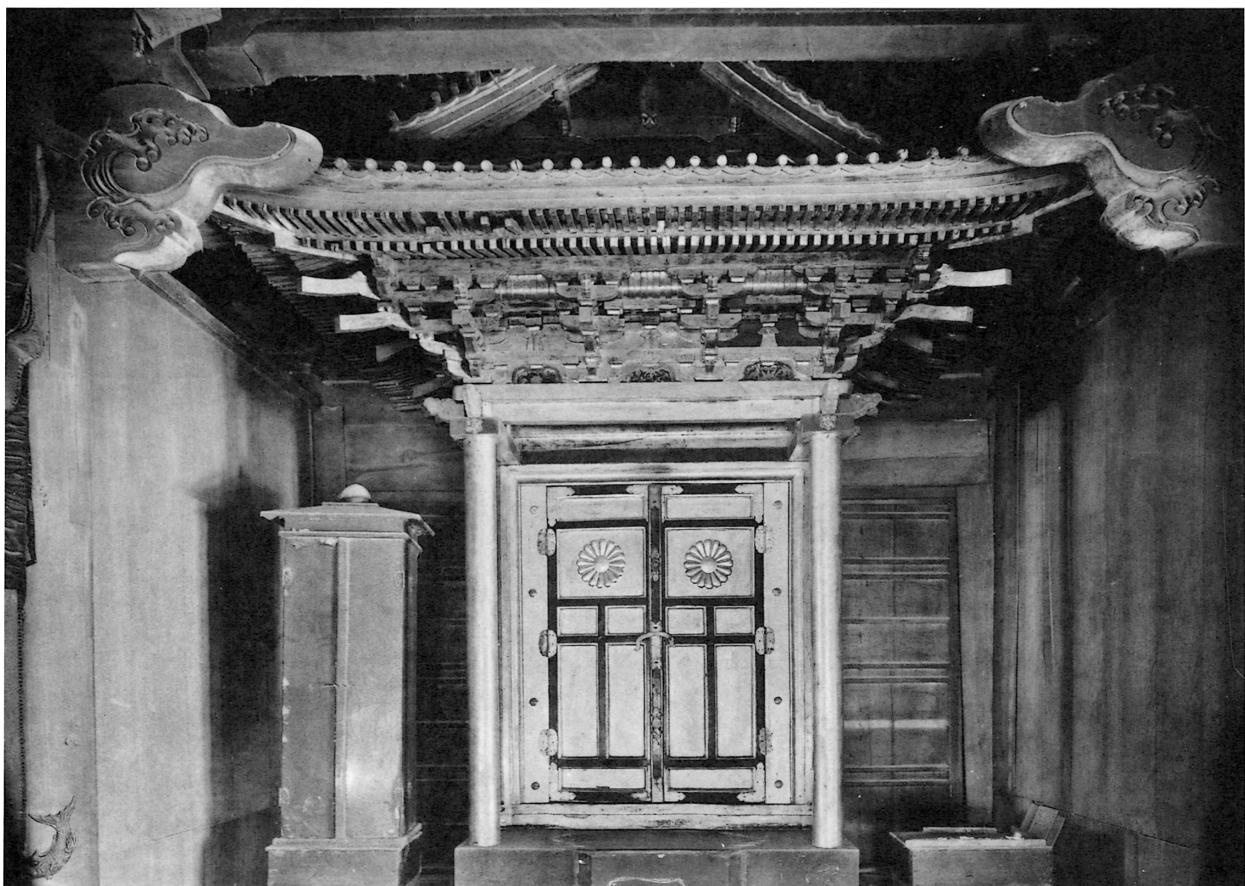


99

竣工

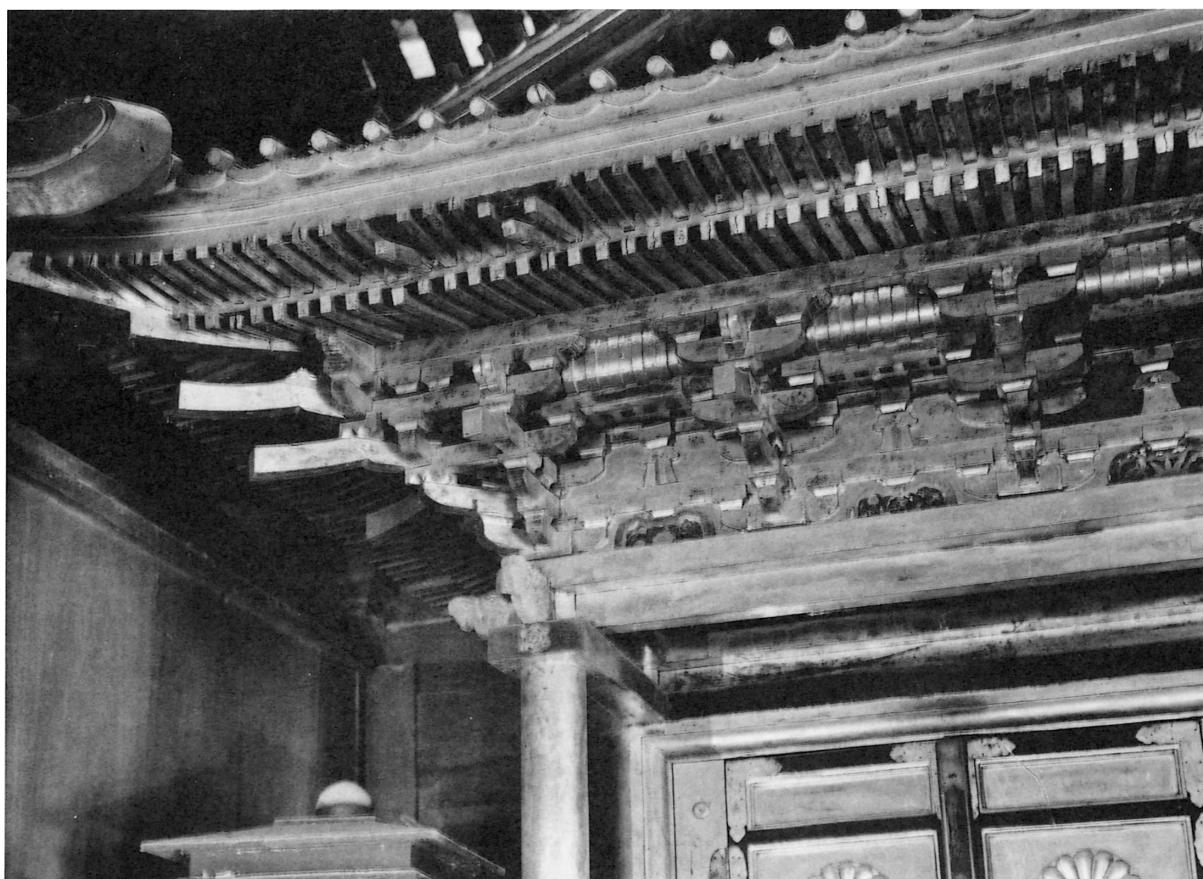
斗栱詳細





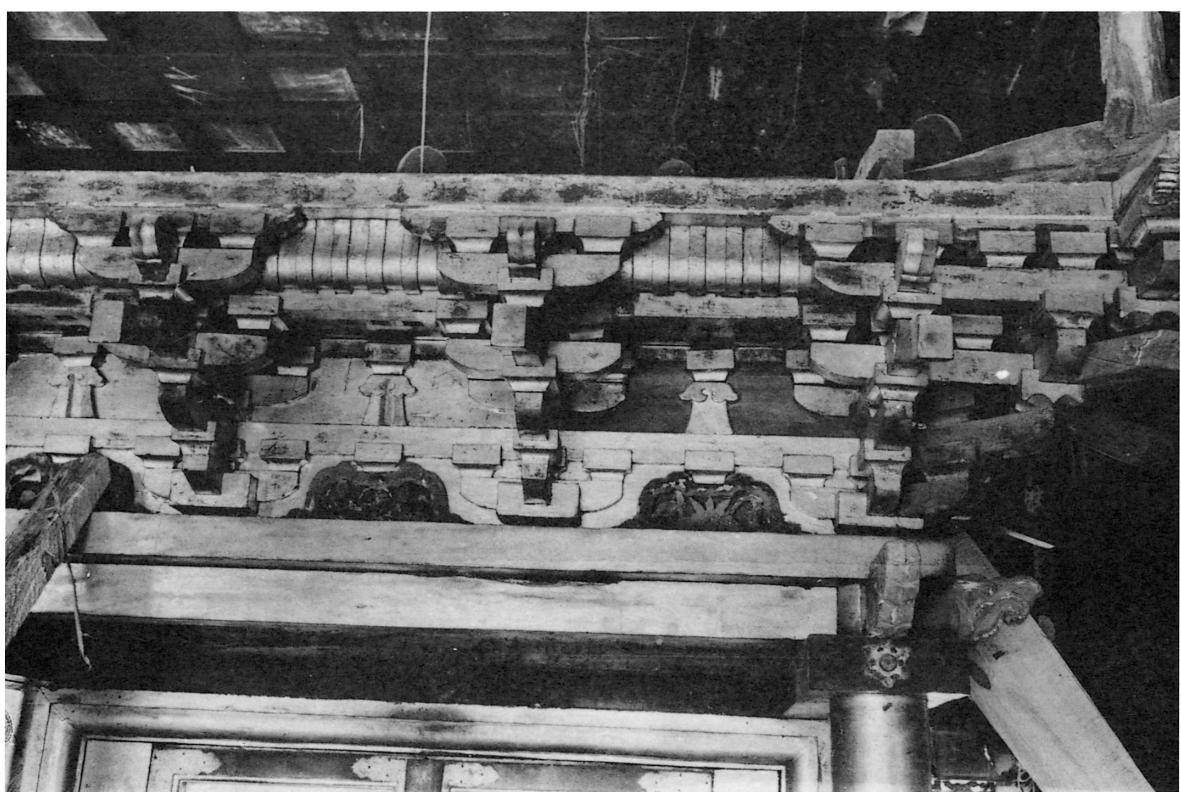
102

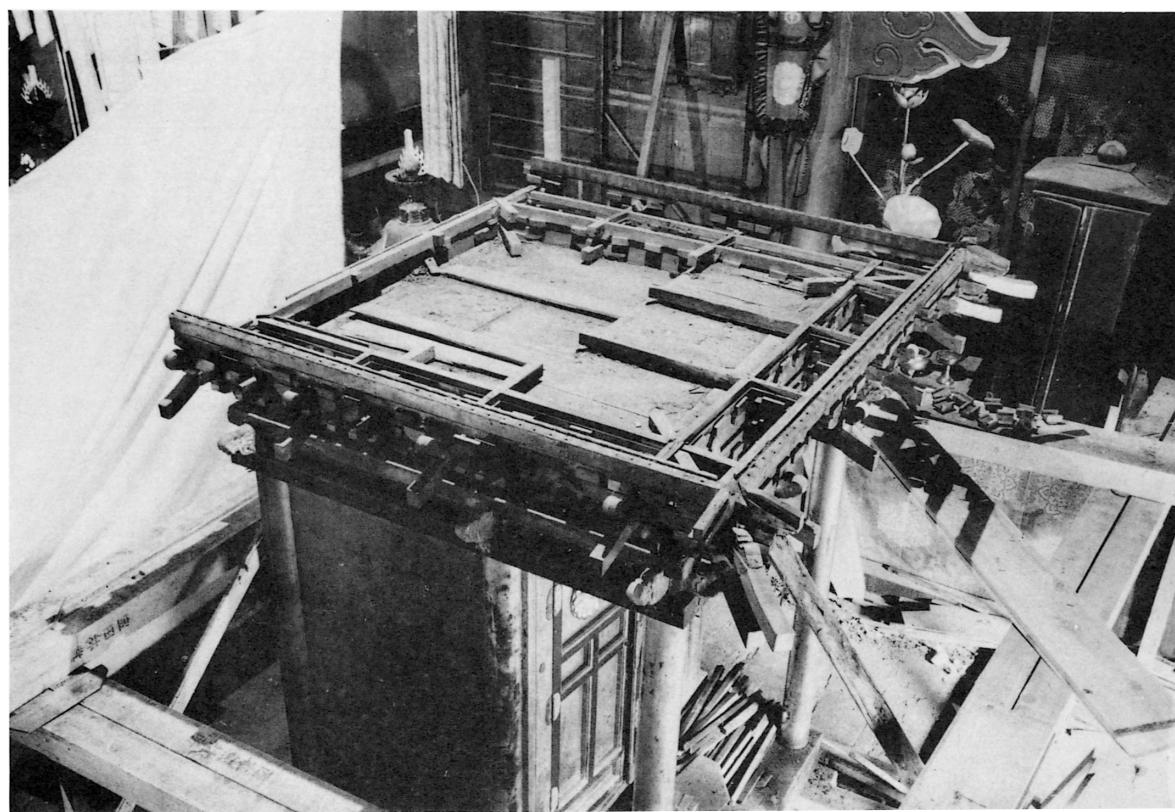
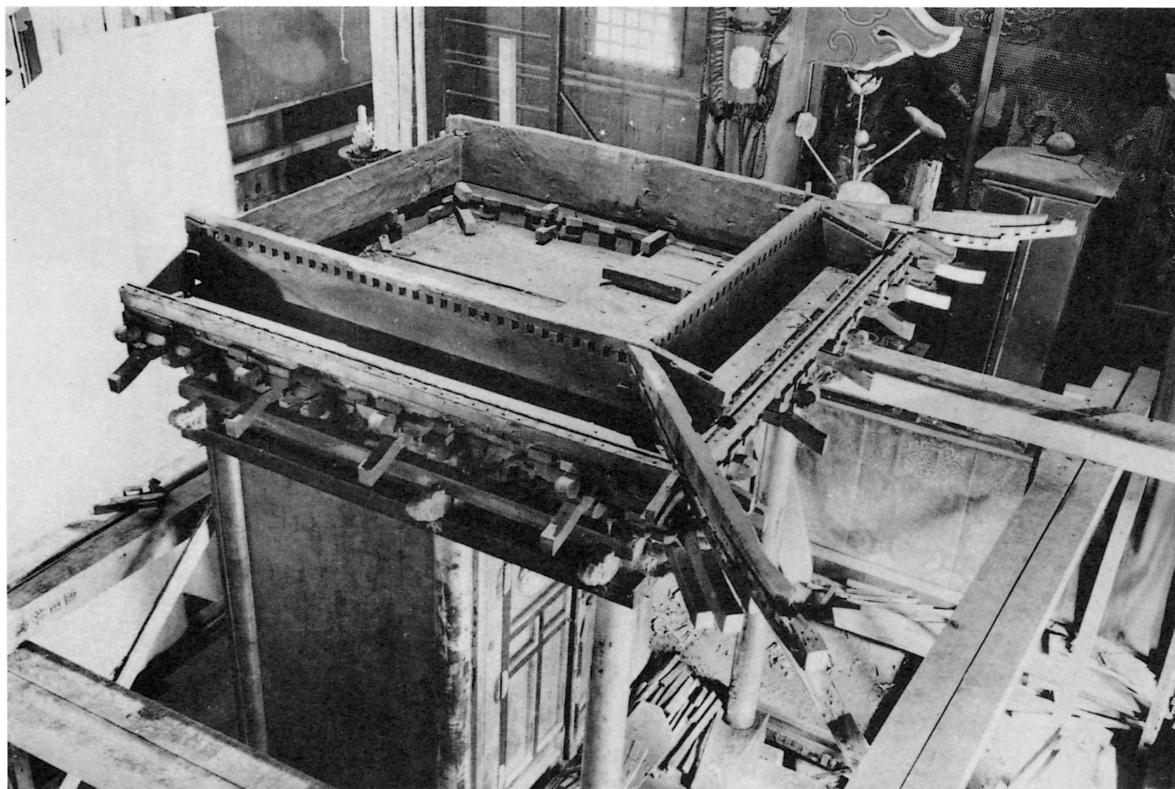
修理前  
軒廻詳細



103

修理前  
斗拱詳細

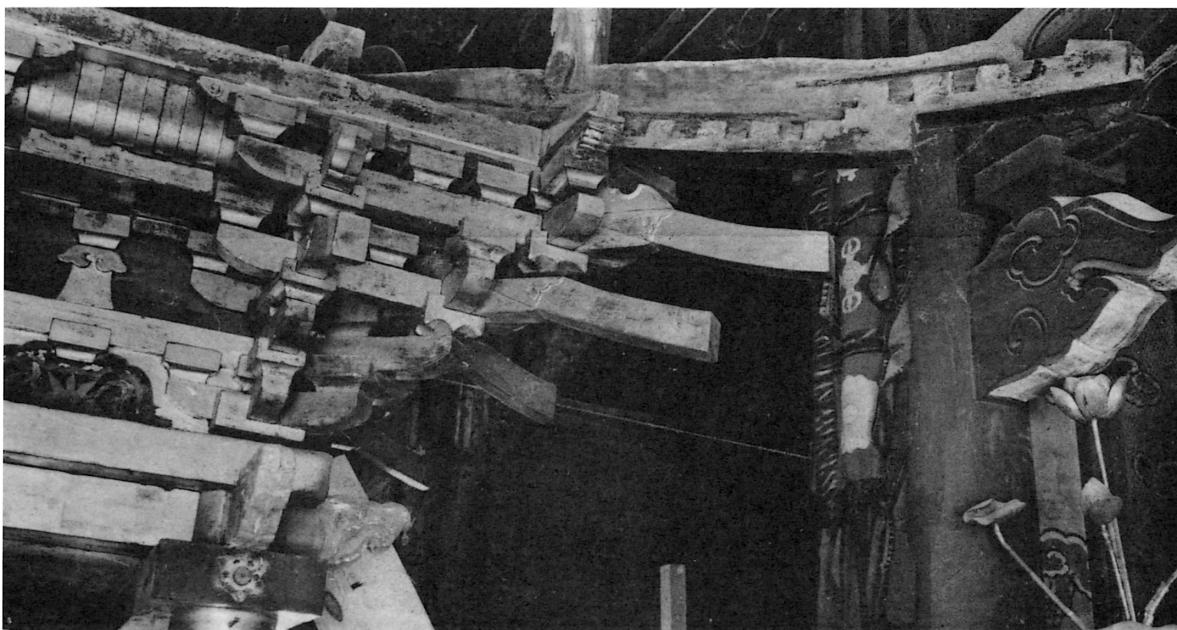




106

解体

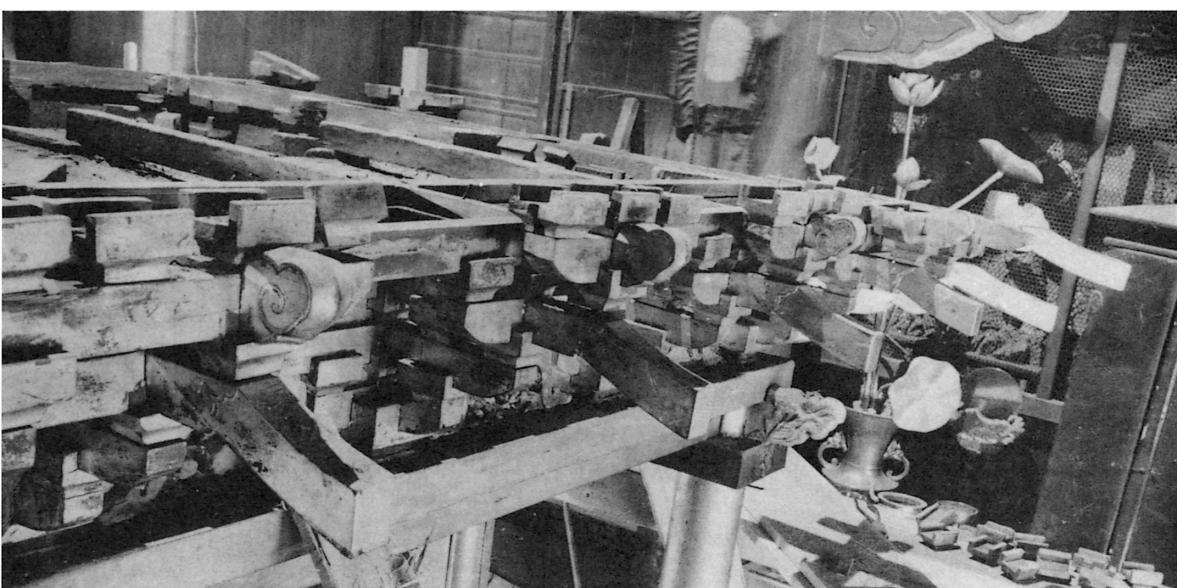
隅斗栱詳細



107

解体

斗栱詳細



108

解体

隅尾樑、菊斗

